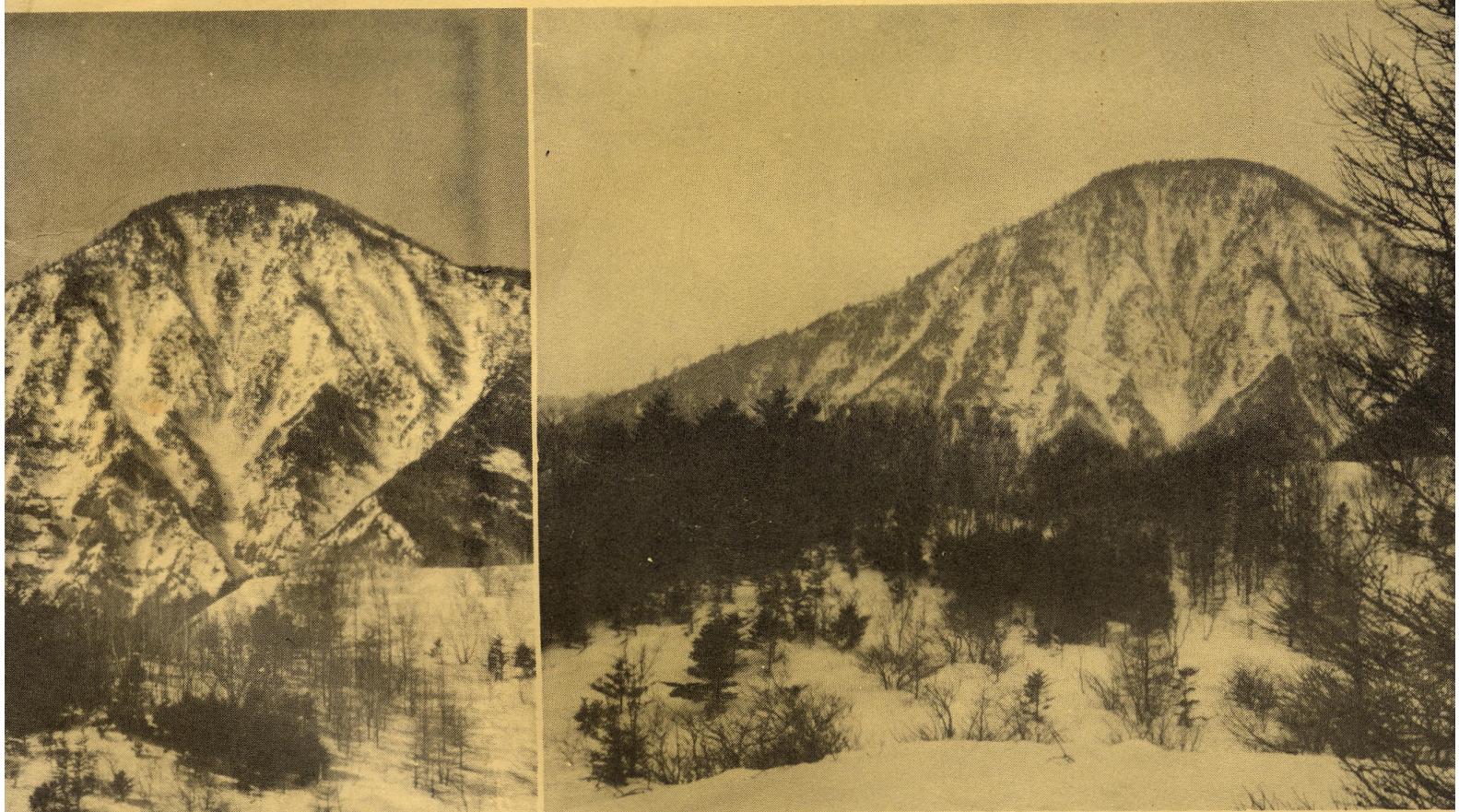


皇海

‘71 ~ ‘74



群馬大学工学部
ワンダーフォグル部

8号

卷頭言

部長 陳 親 博

部誌「皇海」8号をここに発行する。内容は昭和46年から49年までの4年間の部員のワンドリングの記録である。この期間は遭難の前後を含んでいるが、46年の記録は未整理状態で、47年の記録は稜線6号にのっているので、前半の2年間は行動概略にとどめ、後半の2年間について主に記録されている。48年は遭難の後始末も一段落し、クラブにとって再出発の年であった。夏合宿におけるヤブこぎ、秋合宿における沢登りが再開した。続く49年は「沢と積雪期の山」がクラブ目標となりはしたもの、実質的には前年とあまり差はなかった。目標の前者においては足尾においてかなりの成果はあったが、後者は過去の現実を考慮せざる得なかつたので、大幅に縮小され、その実現は50年春まで待たなければならなかつた。

またこの4年間は部員の気質の大きな変化を含んでいるような気がする。クラブに属しているかぎり、ワングルの一部員として規制され行動し、クラブの発展に努力しなければならないにもかかわらず、部員としての責任と自覚をもってそうしている部員が減少してきていることを残念に思う。それは、クラブあるいは山に情熱をもって接する部員の減少や指導者あるいは助言者であるべき上級生のクラブへの消極的参加などに見受けられる。こういうクラブの問題点を1日も早く打破してほしいものである。

クラブの方向性に関しては、前年の活動にとらわれることなく活動すべきである。部員が毎年減少し、年間を通じて全合宿のリーダーとなりえる部員が少なすぎる所以、自分たちの力にあつた合宿を行なわざろう得ないことからもわかる。また積極期の山などを志す人は自分の力を知り、自分自身を見失なわないで行動してほしいものである。

最後に、部員一人一人が責任と自覚を持って行動することを望み、クラブの再建と発展に期待待したい。

部 則

1. 部則作成の経緯

S 47 年冬の岩上、高木、寺林の三君の遭難により、安全性の確保について、部則の必要性が認識され、検討の結果、以下のものとなる。

2(a) 山岳保険………部員は万一に備えて、山岳保険に加入しなければならない。

(b) 遭難積立金………同様の趣旨で、部員は山行届けの提出とともに、1人50円の積立金を払わねばならない。

3. 山行届け

(a) 提出………部員は定められた様式により、出発日の1週間前に山行届けを提出しなければならない。ただし、5月～10月までの1泊以下の山行の場合、出発日の4日前でよい。

長期休業の場合は休業以前に許可を得ること。

(b) 許可の基準………原則として冬山、岩登りは禁止する。

部長、副部長は、上記にてらし、安全であると認めた場合には、それを許可する。

(c) 様式……………別記

○ 無届けの山行は、許されない。もし、起きた場合、部会にて、公表の上、判断を求める。

4. 下山届け………下山した翌日までに、下山届けを提出しなければならない。

5. 山行記録………山行後、二週間以内に、記録を提出すること。

以上をもって群馬大学工学部ワンダーフォグル部部則とする。

目 次

| | |
|------------------------------|----|
| 卷頭言 部長 陳 親博 | 1 |
| 部則 | 2 |
| 目次 | 3 |
| 昭和46年度行動概略 | 4 |
| 昭和47年度行動概略 | 7 |
| 昭和48年、49年度行動概略 | 10 |
| 昭和48年度合宿記録 | 10 |
| リーダー養成合宿 | 10 |
| 雨降～稻含山 | 11 |
| 赤岩峠～三国山 | 12 |
| 父不見山～二子山 | 13 |
| 新人歓迎合宿 | 14 |
| 新人強化合宿 | 16 |
| 夏合宿(薬師原～栗駒山) | 18 |
| 秋合宿(三ヶ峰隊) | 22 |
| 昭和48年度個人山行記録 | 23 |
| 昭和49年度合宿記録 | 25 |
| 春季リーダー養成合宿 | 25 |
| 新人歓迎合宿 | 26 |
| 工学部新人合宿 | 28 |
| 新人強化合宿 | 29 |
| 夏合宿荷揚げ | 30 |
| 夏合宿(須川温泉～焼石岳) | 31 |
| 〃(飯豊隊) | 35 |
| 秋合宿(平ヶ岳) | 38 |
| 春スキー合宿荷揚げ | 33 |
| 秋季リーダー養成合宿 | 38 |
| 昭和49年度個人山行記録 | 40 |
| 特集;雪と沢の記録; | 42 |
| 昭和48年春山スキー合宿(野反湖)(3月21日～29日) | 42 |
| 浅間山 (12月27日) | 44 |
| 大学山岳部リーダー冬山研修会 (3月1日～8日) | 44 |
| 昭和49年度春山スキー合宿(尾瀬)(3月21日～28日) | 46 |
| 巻機山 (4月13～14日) | 47 |
| 白ヶ門山 (11月19日～20日) | 48 |
| 浅間山 (12月27日～28日) | 59 |
| 足尾・不動沢右俣 (8月11日～14日) | 50 |
| 昭和48年度秋合宿 (9月30日～10月4日) | 51 |
| 足尾松木沢上流・皇海沢 (S49年6月30日) | 52 |
| 足尾・小田倉沢・三重泉沢 (8月11日～15日) | 52 |
| 昭和49年度秋合宿 (10月1日～5日) | 53 |
| 部員住所録 | 55 |
| O.B.住所録 | 56 |
| 編集後記 | 60 |

昭和46年度行動概略

年間の方針は(1)未開地の開拓——(奥只見踏破3ヶ年計画の最後の年に当る)。(2)足尾山塊再踏破の二つであって、前年度とほぼ同じであった。(1)としては、奥只見の山々の中でも最も奥深いロングコース(朝日岳—丸山岳—坪入山—城郭朝日山)を縦走した。さらに、我々にとってまったく未知の領域であった沢筋へも足を踏み入れた。秋の渋川源流遡行がその1つである。

新しい試みとしては、三学部合同の第2夏合宿および三大学合同ワンデルングへの参加があげられる。第2夏合宿は教医工三学部間の交流を主目的とし、それまで行なわれてきた三学部合ワンを進展させたものである。宇大、茨大、さらに群大を加えた三大学合ワンが我々に与えてくれたものは、……それは、我々群大工学部ワンデルの持つ強烈な個性の発見であった。

<主なクラブ行事等>

4月19日～24日 平地合宿

5月 2日～ 5日 新人合宿(国境平集中)

- (1) 日光白根山—錫ケ岳—宿堂坊山—三俣山—国境平(海老沼、武井、大島、川崎、高木)
- (2) 裂斐丸山—鋸山—皇海山—国境平(渡辺、尾高、熊田、高橋)
(集中後松木沢を下山)

6月 5日～ 6日 公開ワンデルング(日光)

- (A) 刈込潮切込潮(教育学部担当)
- (B) 戦場ヶ原(工学部)
- (C) 霧降高原(医学部)

6月26日～27日 赤城競歩(工学部—忠治温泉)

7月 9日～11日 夏合宿荷上げ(山口昌、鎌田、武井、高橋)

小立岩から安城又川の支沢を詰め、坪入山と稻子山の中間地点に荷上げをした。

7月20日～8月5日 夏合宿(奥只見)

この山域の特徴はその猛烈なヤブ、そしてヤブの中から時おり姿を現わす無名の湿原、池塘にあるといえる。工学部ワンデルがこの地奥只見に足を踏み入れたのは3年前のことであり、今年はその踏破3ヶ年計画の最後の年に当る。メンバーは全員ヤブコギの経験者であり、会津朝日岳から丸山岳、坪入山、そして城郭朝日山までの完全縦走を計画し、実行した。

本 隊

C.L. 海老沼(記録)、S.L. 尾高(装備)、熊田(食料、会計)、大島(記録)、武井(装備)、高木(食料)、高橋(気象)、川崎(写真)、品田(医療)、長谷、鎌田、山口(昌)

7月20日～21日 ①

桐生(12:19)——(8:45)只見(9:05)——(9:20)登山口——
(10:10)分岐(11:00)——(11:20)林道終点付近



7月22日 ●=

△(4:30)——(5:50)三平ミチギ——(8:55)叶の高手——(9:
45)最低コル 雨のため幕営 △

7月23日 ● 停滞

7月24日 ◎

△(4:55)——(6:00)稜線 朝日岳ピストン(6:30)——(7:40)
白沢ノゾキ——(12:30)△

7月25日 ◎時々①

△(5:00)——(6:05)三角山——(8:10)最低コル——(10:30)
上田湿原(15:48)丸山 △

7月26日 ●→◎ 停滞

7月27日 ●→①

△(8:55)——(9:15)最低コル——(11:25)二重山稜の湿原 △

7月28日 ●キ停滞

7月29日 ①

△(4:40)——(5:33)1723P(5:50)——(7:15)不動沢の頭
分岐——(8:17)湿原、池塘(8:50)——(9:45)最低コル、草原——
(13:16)高幽山(14:10)——(14:40)草原 △

7月30日 ①

△(4:40)——(6:35)最低コル——(9:25)1712P——(11:
17)草原(11:50)——(12:20)最低コル(12:53)——(13:12)
坪入山——(4:40)荷上げ地点 △

7月31日 ① 雷雨

△(7:10)——(10:30)稻子山の肩、稻子山ピストン(13:00)——
(14:30)コル △

8月1日 ①

△(5:40)——(7:02)小沢山——(11:06)ブナ沢山——(14:23)
小手沢山——(15:00)△

8月2日 ○

△(4:30)——(7:40)最低コル(8:07)——(8:35)恵羅窪山
(9:00)——(9:35)隊員の一人がバテぎみのため停滞

8月3日 ○

△ (4:35) —— (10:25) 城郭朝日山 (11:30) —— 城郭沢 —— (15:32) 黒谷川、
集中 △

8月4日 ①

△ (10:13) —— (12:47) 登山口バス停 (13:15) —— (13:30) 只見 ■■会津若
松 ■■郡山 ■■桐生 8月5日朝到着

定着隊

広田、太田、海老原

城郭朝日山のふもとに定着

8月21日～28日 三学部合同第2次夏合宿

(北アルプス雲ノ平集中)

- (1) 8月21日～28日 室堂 —— 劍岳 —— 薬師岳 —— 薬師沢 —— 黒部源流 —— 雲ノ平
(海老沼、児玉、壬生)
- (2) 8月22日～28日 穂高岳 —— 槍ヶ岳 —— 三俣蓮華岳 —— 雲ノ平 (上波、高橋茂、小林茂、篠崎)
- (3) 8月23日～28日 燕岳 —— 大天井岳 —— 槍ヶ岳 —— 三俣蓮華岳 —— 雲ノ平 (武井、寺林、高橋美、高井、川島、小池、馬坂、小林勇、小林亘、石井、石崎、小野里、赤堀)
- (4) 8月23日～28日 針木峠 —— 蓮華岳 —— 烏帽子岳 —— 野口五郎岳 —— 雲ノ平 (尾高、高橋直、須永、高橋京)
- (5) 8月23日～28日 針木峠 —— 東沢出合 —— 赤牛岳 —— 高天原 —— 雲ノ平 (杉田、大島)
集中後、祖父岳 —— 鶯羽岳 —— 三俣蓮華小屋 —— 湯ノ俣温泉を経て七倉へ下山

10月10日～15日 秋合宿 (足尾)

片品川支流坪川源流域三俣沢とその支沢および湯ノ沢遡行

三俣沢の獵師小屋をベースにして宿堂沢、ヌ沢、大岩沢、鈴小屋沢右俣を遡行した。(海老沼、山口昌、太田、武井、高橋、山口朗、品田、高木)

10月16日～17日 三大学合ワン準備山行 (庚申山)

秋合宿に続きそのまま国境平 皇海山 —— 庚申山を経て宇都宮大学庚申山荘で開かれた合ワン準備山行に参加した。(工学部からの参加者—海老沼、山口昌、武井、山口朗、品田、川崎)

11月6日～7日 三大学合同ワンデルング (那須高原) 群馬大、宇都宮大、茨城大 (工学部からの参加者—長谷、太田、山口昌、鎌田、渡辺、尾高、海老沼、山口朗、武井、大島、品田、高橋、川崎、高木、熊田)

11月18日～22日 リーダー養成合宿

鬼怒沼 —— 燕巣山 —— 金精峠 —— 中禅寺湖 —— 間藤

新執行部のチームワーク向上を主目的として行なった。(武井、高橋、熊田、品田、山口朗)

広瀬、高木、鍊田)

11月28日 仙ノ倉山荘薪割り

(武井、稻葉(A C)、岩上(A C)、寺林(A C))

12月4日～5日 春スキー偵察(野反潮)

(武井、児玉医、小野里(教養)、小林茂(教養))

12月6日～11日 平地合宿

12月20～23日 スキー合宿(石打スキー場)

12月31日～1月1日 元旦登山 (赤城・黒檜岳) (工学部から 武井、品田)

昭和47年1月1日 新年会(O B 会総会)

1月2日～6日 正月スキー(野沢温泉)

2月13日 (高木、岩上、寺林三君蓬沢にて遭難)

以下搜索活動の詳細については「谷川岳蓬沢遭難追悼集」(1974発行)を参照

2月18日～26日 谷川岳搜索 (全山)

2月27日 第一回遭難対策会議

3月5日 W V 部 O B , 現役話し合い(安全対策について)

3月18日～20日 谷川岳搜索 (天神尾根～蓬沢)

(西口、稻葉、相川(以上 A C)、山口昌、川崎(以上 W V))

3月26日 第二回遭難対策会議

昭和47年度行動概略

当初の年間方針は(1)身近な山を中心とした幅広い活動(特に上越、奥只見周辺の山域)、(2)足尾山塊徹底踏査(ホームグラウンドとしての足尾山塊の四季の姿、および沢までも含めてその全貌を明らかにすること)であった。そこで、夏合宿には沢登りをも含めたコースを検討し、また積雪期の足尾へも足を踏み入れようとしていた。46年11月に新執行部のメンバーで鬼怒沼～金精峰を縦走したのは、積雪期の山をめざしての足固めでもあった。

ところが、我々新執行部にとって希望あふれる年となるべき昭和47年の幕開けは、なんと部員(それも新執行部としてクラブの中心となるべきメンバー)の遭難という悲しい事態からであった。この事実はその後の我々の行動を大きく変えた。3月5日にはO B を交えた話し合いが持たれ、安全対策を重視したワンゲル活動について再検討することが確認された。一つは部則の制定(活動範囲の制限についても触れた)、もう一つは三学部のワンゲルの合同についてであった。

年度初めの活動はすべて搜索へと向けられた。搜索終了後夏合宿までは三学部合同で合宿を行なった。夏合宿は、準備期間が短かかったこと及びワンゲル全体で一つのことをやろうということから、群馬県境全山縦走を行なった。ともかく初めての試みであり、工学部の意見を強引に押し通してしま

つたこともあって、後にかなり問題を残してしまった。しかしある程度の成果は得られたと思う。こんな大きな合宿は二度とできないのではないか。秋合宿については三学部で期日が合わないこと、及び各学部の独自性を尊重するということから、各学部単独で行なうこととした。年間を通して沢登りは一切行なわなかつた。

< クラブ行事等 >

搜索関係の詳細については「谷川岳蓬沢遭難追悼集」(1974発行)を参照

4月23日 第三回遭難対策会議

4月26日～5月6日 蓬沢搜索

4月26日 先発隊出発

4月28日 本隊出発

5月 3日 高木、岩上両君発見

5月 6日 第四回遭難対策会議

5月14日 蓬沢搜索

5月20日～21日 蓬沢搜索

5月21日 寺林君発見

5月20～21日 新人合宿 赤城山 (三学部合同) (桐生より、川崎、馬坂、高橋(京) 大前、加藤)

5月27日 第五回遭難対策会議

6月 1日 蓬沢サク撤去

6月17日～18日 新人強化合宿 (三学部合同)

(1) 谷川岳—三国峠 (高橋(京) 山口朗、須永、高橋(京) 柴崎、小林(三) 陳、牧志、三橋、菊地、金谷)

(2) 白毛門—谷川岳 (川崎、熊田、尾高、篠崎、加藤、綱川、仁木、相川、山田、井田、吉島)

(3) 浅間山—湯ノ丸山 (高橋(京) 小池、石崎、北爪 前原、井上)

(4) 湯ノ小屋—至仏 尾瀬ヶ原 (杉田、品田、藤田、井野口、牧)

(5) 鬼怒沼—尾瀬沼 (児玉、広瀬、馬坂、大前、宮野、石井、三森、三洞、永島、岡部)

(6) 庚申山—皇海山 (栗原、大島、小林(三) 小林(勇) 嶋村、平井)

(7) 裂巻丸山—小坊師尾根 (武井、海老原、海老沼、太田、伊与久 赤堀、松井)

7月1日～2日 赤城競歩 (工学部 忠治温泉)

ワンダーフォーゲル部: クラブ優勝

7月26日～8月4日 夏合宿 (三学部合同)

群馬県境全山縦走 (詳細は「稜線」6号(1972)参照)

(1) 皇海隊

袈裟丸山 — 皇海山 — 宿堂坊山 — 日光白根山 — 燕巣山 — 鬼怒沼 — 尾瀬 (川崎、大島、藤田、平井、綱川、須永、仁木、井上、永島、鎌田)

(2) 奥利根隊

谷川岳 — 蓬峠 — 柄沢山 — 卷機山 — 小沢山 — 丹後山 — 平ヶ岳 — 大白沢山 — 尾瀬 (杉田、海老沼、児玉、広瀬、馬坂、篠崎、岡部、金子、前原、牧、井野口)

(3) 浅間隊

浅間山 — 湯ノ丸山 — 四阿山 — 御飯山 — 万座山 — 芳ヶ平 (高橋俊、山口朗、柴崎、鶴村、陳、三森、山口昌)

(4) 荒船隊

菅峰 — 浅間隱山 — 鼻曲山 — 荒船山 — 十石峠 — ヤジノ平 — 三国山 (武井、熊田、小林、吉島、山洞)

(5) 天丸隊

塚山 — 父不見山 — 二子山 — 赤岩岳 — 天丸山 — 三国山 (栗原、品田、壬生、牧志、岩井)

(6) 藤原隊

越後駒ヶ岳 — 中ノ岳 — 大水上山 — 藤原山 — 平ヶ岳 — 大白沢山 — 尾瀬 (高橋義、高井、赤堀、大前、加藤、小林三、宮野、松井、菊地、松村、金谷)

(7) 白砂隊

谷川岳 — 仙ノ倉山 — 三国山 — 稲包山 — 白砂山 — 野反潮 — 赤石山 — 芳ヶ平 (伊与久、関口、小池、川島、高橋涼、石井、井田、山田、北爪、新井)

8月15日～16日 蓬峠道標荷上げ

8月18日～20日 追悼山行 蓬峠

10月7日～8日 蓬峠道標荷上げ、作製

10月11日～14日 秋合宿 国境平集中

(1) 日光白根山 — 錫ヶ岳 — 宿堂坊山 — 国境平 (藤田、須永、小林、山口朗、海老沼、高橋)

(2) 半月峠 — 社山 — 黒檜山 — 三俣山 — 国境平 (大島、武井、馬坂、加藤、鎌田、平井)

(3) 袈裟丸山 — 鋸山 — 皇海山 — 国境平 (川崎、広瀬、篠崎、品田)

11月3日～5日 三大学合ワン 日光霧降高原

清掃合ワンと銘打つて霧降高原、光徳牧場、戦場ヶ原でゴミ拾いをした。 (工学部からの参加者 武井、山口朗、大島、熊田、高橋、藤田、小林、柴崎、篠崎、大前、須永、馬坂、加藤)

12月20日～23日 スキー合宿 (石打スキー場)

昭和48年1月1日 新年会 (O B 会総会)

1月4日～8日 正月スキー (野沢温泉)

昭和48年・49年度 行 動 概 略

48年は再出発の年で、新人歓迎、新人強化合宿まで三学部合同で行なわれた。夏合宿は当初2パーティ（薬師原～栗駒山、焼石岳～栗駒山）であったが、故障者続出のため前者の1パーティに絞られた。後者のルートは次年度にもちこされた。昨年に引き続き追悼山行が八月下旬に行なわれた。秋合宿において沢登りが再開され、三大学合ワン、石打スキー合宿と続き、49年になり、野沢温泉でスキーが行なわれた。春山スキー合宿は昨年は野反湖であったが、今年は久しぶりに尾瀬である。リーダー養成合宿は昨年とほぼ同じで新人強化合宿（公ワンは昨年と同様で尾瀬であった。）まで三学部合同で行なった。五月の連休には部員が雪になじむために足尾山塊の縦走が再開された。夏合宿は、2パーティ（須川温泉～焼石岳、飯豊山）となった。昨年同様、追悼山行、秋合宿における沢登りも行なわれ、足尾の沢は登れる範囲内のものはだいたい踏み込まれてしまったようだ。今回は三大学合ワンに参加せず、下級生の要望もあってリーダー養成合宿を行なった。例年のように石打のスキー合宿も行なわれた。

特集として、この2年間の雪と沢の山行記録がある。

昭和48年度 合宿記録

リーダー養成合宿 1 Party

地域（雨降～御荷鉾～赤久繩～稻合）

メンバー C. 藤田 S. 加藤、品田、熊田、金子

4月5日 ◎→⊗-

桐生(9:06)---(9:51)高崎(10:15)---(10:31)藤岡(11:02)---(11:27)鬼石(11:30)---(11:55)犬塚(12:00)---(12:15)林道終点・昼食(12:50)---(13:25)杉の大木(13:30)---(14:30)祠(14:35)---(15:00)雨降山(15:15)---(15:45)林道・山神の石(15:50)---(17:00)石神峠

バスを犬塚で下車し、三波川にかかる尾柿橋を渡り、林道尾柿線の終点にて昼食。ここが最後の水場である。雨降山までは登山道があり、念の為に赤テープを付けておいた。最後の高度差200mがきつかった。祠というより小屋（4.5畳、使用可）に着くころより雪がパラツキはじめて気温が急に低下する。小屋の位置は雨降山頂東方の960mのピークである。雨降山頂からは下久保ダムと神流湖がよく見えた。また南面は切り開かれてヒノ木が植林しており、眺望良好。ここより石神峠までは踏み跡があるが峠近くははっきりしていなかった。途中で山神と石に彫ってある所があった。地図の法久から北へ向っている道が稜線に出た地点である。ここからは法久へは林道で、三波川方面へは徒歩道となっていた。石神峠は登山道のみで林道化されていないので気分が良い。周囲はカラ松（北面）とヒノ木（南面）が植林されていた。今日は峠にて幕営する。

4月6日 ○→①→○

△(6:00)——(7:00)東御荷鉢山(7:30)——(8:10)投石峠(8:45)——(9:35)
西御荷鉢山(10:00)——(10:45)アキヤ峠——(10:55)オドケ山ピストン・昼食
(12:10)——(12:35)高岩山(1157m)——(13:03)塩沢峠(13:08)——
(13:30)宝録峠——(14:45)白鳥岩分岐・昼食(15:23)——(15:57)早瀧分岐・天気
図(16:23)——(16:45)赤久繩山△

昨夜は寒くて何回も目が覚めた。4時起床、6時出発。天気快晴で東御荷鉢山頂からの展望はバツグンで、浅間山は噴煙を吹き上げていた。投石峠にて柏木方面へ水を取りに行く。下り10分。上り15分。なおこの縦走路での水場はここだけであるから必ず水を補給しておくべきである。西御荷鉢山は山頂が東西に長く(50mほど)両端には不動様の石像があった。東御荷鉢山同様に見晴が良い。オドケ山ヘピストンしたが、かなりの急登であった。約10分で縦走路より山頂に着いた。山頂には石の祠が2つあり、木々の間に東・西御荷鉢山が見えた。この山頂までは踏み跡程度の道で、赤テープを付けておいた。高岩山は北面を巻いて塩沢峠へ向った。塩沢峠の南面は切り開かれており、栗木平からの林道がここまで来ている。宝録峠から我々は稜線を忠実に歩いたが白鳥岩付近を通る近道もある。御荷鉢山から赤久繩山まで小さなピークが数多くあったがほとんど道は巻いているので楽であった。日が落ちてから気温が急激に低下する。今日はくずれかけた1等三角点のやぐらのある赤久繩山頂に幕営する。余談となるが、私の郷土である埼玉の本庄では「御荷鉢の三束雲」という言葉があり、6月の麦刈りの時期に御荷鉢の山に雲がかかると、麦を三束ほど束ねるうちに雨が降ってくるということで悪天の致來を知らせる印なのだそうである。また4月28日は不動様のお祭りでこの日には地元の人々は三三五五連れ立って御荷鉢山に登山するそうである。

4月7日 ○

△(6:05)——(7:55)杖植峠手前・稻含山分岐(8:00)——(10:22)稻含山東面・新宮付近(10:30)——(10:40)鳥居(宮城・来波分岐)10:55)——(11:00)下仁田分岐——(11:30)稻含山・昼食(12:30)——(12:50)下仁田分岐——(13:20)林道終点——(15:25)下仁田駅(15:30)+++++(16:33)高崎駅(16:58)=+(17:45)桐生駅

今朝起きると一面に霜がおりていたが、快晴で真白な富士山も南方に望まれた。赤久繩の下りは倒木があった為に少し歩きづらかった。途中のピークはほとんど巻き道があったが一ヶ所南面を巻いて誤って下ってしまった。稻含山への分岐のピーク(1500m)では晴れていたので迷わずに済んだがガスがかかっているとわかりにくく、気が付かなければ南面の持倉方面へ下る道に入り込んでしまうであろう。念のために赤テープを付け、切株にマジックで印を付けておいた。分岐より稻含山までのピークもほとんど巻いており、1455.2のピークは頂上部が露岩となっていたが、このピークも北西面を道は巻いていた。そしてここまで稜線からの西方の眺望はすばらしいものであった。1455.2の北北東1360のピークから東北東1185に伸びている尾根の北面はほとんど伐採されていた。1360

のピーク（ここも西面を道は巻いている）を過ぎて稻含山に向ったが、1200mの等高線の所で頂上に向う道がはっきりせず東方に向かうはっきりした道につられて進んでしまい。結局この道は等高線にそって稻含山東面を半周も巻いている道であった。この道を行くと稻含山東面の鳥居の印の少し南の沢で水が取れた。その少し先に白木造りの鳥居がある。ここには宮城・来波へ各2時間という道標があった。ここにザックを置いて稻含山へ向うと5分で下仁田へ下る分岐に出て、赤い鳥居をくぐって頂上へ。三角点の頂上のすぐ下方に稻含神社があり、山小屋がわりに使用できる。この稻含神社は本来は蚕の神様で今は亡き我が祖父はよく稻含神社は養蚕の神様と言っていたような気がする。この山頂付近にはアセビの木がたくさんあった。下山後、下仁田分岐より下仁田へ下ったが、林道終点が下仁田から稻含山へ登る場合の最後の水場となることを付け加えておく。なおこの付近はカラ松が植林されている。

下仁田町までの林道は長く感じられた。もし、下仁田から稻含山へ登山するのなら、できるだけ奥までタクシーを利用することをすすめたい。ただし金に余裕のない者は歩くより他に方法はないが。
(反省)

道があったために、また天気にめぐまれたために楽な山行となり、リーダー養成合宿としてはものたりない感じがしないでもない感じであった。しかしリーダーとして山行する時の心がまえや、注意すべき点などを学び得たことは意義があった。

(藤田 健司記)

リーダー養成合宿

○赤岩峠～天丸山～三国山

4月5日～7日 馬坂、須永

4月5日

桐生 — 藤岡(8:07) — 万場(9:45) — 八幡 — 赤岩峠(14:40) — 雁掛峠(15:20) ↳

4月6日

↗ (6:40) — 焼山(9:30) — 乙父沢分岐(15:10) ↳

4月7日

↗ (6:50) — 乙父沢(10:10) — 藤岡(13:35) — (15:00) 桐生

4月5日

林道を行くと野栗沢分岐を過ぎ沢道に入る。登山道が本沢から東に登っている所があるが、これは東に分かれる沢づたいに道がついている。左右に伸びた道につきあたり、左に20分程で赤岩峠へ着く。雁掛峠は狭く幕営するのに苦労した。水場は南面の沢を5分ほど下る。

4月6日

県境の岩峰の連続で、危険な所はまき道が埼玉県側についていた。県境が南に折れているピークで、まっすぐ西にも道があるので注意。木に赤ペンキがついていて、そこを南に折れる。この先のまき道

は群馬県側に多い。乙父沢分岐の30分程手前の埼玉県側のまき道に2～3人程ねられる岩小屋があった。分岐手前のピーク（地図にない）より埼玉県側に尾根が出ているが、間違って下らないよう。水場は分岐より西沢を10分下った。

4月7日

記者が風邪ぎみで、時間的にも問題があるので、乙父沢西沢を下る。実際沢道はなく、沢下りの怖さを身にしみて感じる。小滝があるし、両端はすべるし、こわごわしばらくゆくと道が見つかった。沢道は川を左右に渡りながらついている。木を切り出している人に会いほっとする。林道を1時間程歩くとバス停である。

（馬坂 達男記）

5 Party <父不見山—二子山>

メンバー 小林茂 (CL) 赤堀 (SL) 大島

コースタイム

4月6日 ○

前橋(9:00)——(10:40)飯島(11:05)——(14:50)父不見山——(15:10)長久保山(15:15)——(16:05)坂丸峠 ↗

4月7日 ○

↗ (7:45)——(8:40)屋久峠——(9:45)960mP(9:50)——(13:35)二子山肩(14:00)——(14:15)二子山(14:35)——(14:50)二子山肩(14:55)——(15:25)分岐 ↗

4月8日 ○

↗ (7:00)——(7:50)叶山分岐(7:55)——(8:35)叶山(8:45)——(9:20)叶山分岐(9:25)——(9:50)志賀坂トンネル(10:00)——(10:30)神ヶ原(古鉄橋)(11:31)=(12:05)万場(12:10)——(12:30)飯島(12:40)——(14:30)前橋

4月6日 ○

大島さんの家を9時に出発する。利根橋を渡り、藤岡県道を一路南下した。飯島の土坂峠への入口付近に車を置いていくことにする。土坂峠への自動車道を歩き始める。遠くの山はほんやりと霞み、何一つ春を感じさせないものはない。千ノ沢との出合にて、土坂峠への自動車を左下に見て、千ノ沢に入る。地図には出でていながら、こちらにも林道がはいっている。この林道を少し歩くと、「おみなえし橋」というのが千ノ沢にかかっている。コンクリート橋である。この橋を渡った所が2岐になっている。左手の尾根に登っているのと千ノ沢を詰める自動車道である。右の道に入り、右岸を歩く。しばらくするとコンクリート橋があって、林道は左岸に移る。この林道を行けばよいのである。林道はつづら折なので2、3ヶ所近道をする。右手から出ている大きな沢の所までこの林道は続いていて、これより細い道となる。目の前の尾根を巻くようにして道は続き、すぐ二俣の分岐となる。右はどうも尾根に登っていそうなので、左の道をとるが、予想とは裏腹に、千ノ沢に下ってしまい、おまけにこの一月、二月の湿雪で数億円の被害を出したといわれる杉の倒木で致るところ道をさえぎられる。

致し方なく少し戻り、直登する。20m程で正ルートに戻れた。それにしても、この杉ノ峠への道は、その名を象徴するが如く杉の山である。右手からの二番目の沢に行き当たる。ここは十分水がとれるが、峠から下ってくるとすると20分位かかるであろう。細い尾根に出ると、微風がそれとなく通り過ぎる。峠まで行かずに右に入る。踏み跡があり、その先はすっかり伐採されていて、平に父不見山の下まで続いている。足場が軟らかいので非常に歩きづらい。尾根に出ることにする。10m程の北面の急斜面を直登するのであるが、なんと下の方はまだ凍っているのである。尾根に出ると道があった。父不見山には昨年の夏合宿の時のプレートが打ちつけてあった。御荷鉢一赤久繩の稜線を右手に見上げて歩く。長久保山からは、Kが先に行って天気図をとることにする。P960mの手前のコル付近は二重山稜の様相を成している。P960mの下りは真西に下るよりも、いくらか南寄りの方がよい。すぐに道に出るから。坂丸峠に幕営する。我々は峠にテントを張ったが、群馬側に少し下った左側の林の中の方がよさそうである。風は当たらないし、道を渡らなくて済むから。水場は群馬側へ10分程下った所である。碎けた岩が多いので伏流しているから適当な場所を捜す。

4月7日 ○

屋久峠はそのすぐ近くまで埼玉側から林道が入っている。道は坂丸峠から屋久峠の少し先まであり、後は道らしきものがあつたりなかつたりである。道がなくてもヤブらしきものではなく、キスもそれ程ジャマにならない。群馬側はガレている所が多い。埼玉側はほとんど植林された杉林である。二子山の登りは岩場でどこでも登れる訳ではない。尾根から真直ぐ取り付くよりも幾分南寄りの方がよさそうである。ここに来てようやく山に来たという感じがする。今まででは桐生の裏山を歩いているという感じで、下界の雑音は聞こえてくるし、途中には桑畠もあった。肩から二子山をピストンする。目の前の天理、両神、天丸の岩峰がやけに大きい。どっしりした御荷鉢、赤久繩山も高い。二子山を急降下すると魚尾峠で宮地、坂本との分岐である。

4月8日

このまま下ってしまっては早すぎるので叶山をピストンすることにする。叶山との鞍部より少し南に分岐がある。瀬林の方に下っているらしい。志賀トンネルより自動車道を歩くが間物の少し手前でトラックに拾われ、神ヶ原まで御厄介になった。

(小林 茂記)

新人合宿 3学部合同（赤城にて）

期日 5月5日～6日

編成 10 Partyを2班に分け、班別に行動。

記録

料金所(8:27) — (10:00)鍋割高原(10:45) — (11:42)鍋割頂上(11:54) — (13:28)荒山山頂(14:03) — (15:05)小沼△ キャンプファイヤ(6:30)

例によって、赤城での合宿。人も驚く、群大ワンゲル。料金所で水をつめて、出発。A班とB班で時間差を30分程つけるが、何事もなし。同じように新人がばて、又、同じような所で少休。チーフのSが鍋割の登りで冗談を、真に受けて、左側に道がある所を、藪をこいで直登する。鍋割の肩で、食事とするが、早くもB班と、一緒になってしまう。ここからの登りは、始めてキスリングを背負う新人にとっては、最初の試練でもある。もっとも、今年は、1泊であるので、共同装備が少なく、例年よりも楽であろう。それ程ばてる者もなく、鍋割到着。周囲の山も、新人にとっては、初待面の山であるかの毎く、感じるらしい。聞かれて困る旧部員。なきなし。鍋割山頂からは、幾分、縦走めいた感じを味わえるが、残念ながら有料道録と車の騒音で、半減してしまう。荒山高原より荒山の登りも、長く、嫌な所である。ここまで来てしまうと、地蔵のバラボラアンテナと赤城温泉への自動車道が、我々の視界に入る。いくら新人のオリエンテーションでもこれは頂けない。小沼への自動車道の登りはわずかだが、ここまで来るとホッとしたのか、列は伸び間かくも開きがちである。例によって夕食後のファイア。

5月6日 ①

△ 小沼(6:13) — (6:37)大沼(6:43) — (7:27)稜線 — (8:05)黒絵山頂
(8:20) — 大沼(9:08) — (12:00)鈴ヶ岳(13:08) — (14:33)一本松(14:48)
— (15:53)深山(17:05) = (17:30)敷島

4:00に起床して、大沼へ急ぐ。湖畔にザックを置き、一路黒絵に向かう。例によって、手前のコルから、学年別マラソン。パノラマを楽しむ余裕もなく、下山する。今回は小黒檜のピストンは中止である。例によって、自動車道を、好奇の眼差しをはねかえしつつ、又、或る者は、一向、無とん着に、湖面などを眺めつつ、鈴へと向う。鈴に向かう途中B隊で、車のホイールに当たるという事故があったが、大事には至らず、即、出発する。鈴で、大休止後、下りにかかるが、船頭が多かったようである。用は、一本松を目指して、尾根沿いに下れば良い。ただし落石には注意の事。一本松から、深山まで、休みがなかったので、先頭と後尾で30分の遅れが出る。

反省 ○赤城での新人合宿は一考の余地あり。

○パーティーのリーダーは自分の責任を自覚すること。

(須永 守記)

新人強化合宿

○平標山～蓬峰 5月31日～6月3日

馬坂、鷲村牧医、片柳、吉田、上原、服部、島田、杉田

5月31日～6月1日 ◎

前橋(19:23) — (2:58) 土樽(3:54) — (12:04) 平標山(12:27) — (13:
16) 仙ノ倉山 ↗

6月2日 ● → ◎

↗ (4:53) — (9:15) 大障子小屋(10:48) — (13:40) 肩の小屋 ↗

6月3日 ● → ◎

↗ (6:20) — (10:20) 武能岳(11:04) — (11:33) 蓬峰(12:14) — 土樽(14:
55) — (16:30) 前橋

○谷川岳～巻機山 5月31日～6月3日

綱川、仁木、井上、大塙、大崎、黒崎、池上、羽鳥、武井、

5月31日～6月1日 ◎

前橋(23:03) — (2:55) 土合(3:05) — (9:35) 茂倉岳(9:45) — (11:50)
蓬峰(12:10) — (13:35) 清水峠 ↗

6月2日 ◎

↗ (4:05) — (8:35) 檜倉山(9:15) — (14:30) 巷機山のTPより50mくらい手
前の地点 ↗

6月3日

↗ (8:00) — (8:10) 牛ヶ岳ピストン(8:45) — (11:45) 清水部落 — 六日町

○野反湖～横手山 6月1日～3日

井野口、松村、川崎、高橋、渡辺

6月1日

桐生(6:35) — 長野原(8:55) — 花敷(10:00) — (13:30) 弁天山(13:40) —
(15:35) カモシカ平 ↗

6月2日

↗ (5:30) — (6:40) 大高山(6:55) — (10:10) 赤石山(10:55) — (14:20)
四十八池(14:25) — (15:25) 熊の湯・笠越キャンプ場 ↗

6月3日

↗ (6:55) — 草津峠(8:55) — (10:30) 横手山(11:10) — (13:10) 長野原
(14:51) — 新前橋

○社山隊 6月1日～3日

篠崎、赤堀^教 大前、牧志、後^教 吉田^教

6月1日 ○→◎

桐生(6:38) ■■■ (8:31) 間藤(9:00) — バラクラ尾根取付(11:00) — (15:30) 社山(15:40) — (15:55) 社山直下のコル △

6月2日 ●_キ→◎

△ (4:40) — (10:50) シゲト山(11:00) — (14:15) 三俣山(14:25) — (17:20) 日向山 △

6月3日 ◎→●

△ (6:30) — 国境平 — 間藤(13:18) ■■■ 桐生

○袈裟丸山～皇海山 6月1日～3日

壬生^医 小林^教 石井^教 加藤、山洞、生出^工 塩島^教 海老沼

6月1日 ◎

桐生(6:38) ■■■ (7:55) 沢入(8:05) — (12:05) 賽の河原(12:10) — (14:18) 小丸山(14:30) — (14:38) 袈裟丸小屋 △

6月2日 ●→◎

△ (6:24) — (10:04) 奥袈裟丸山(10:37) — (12:37) 六林班(12:47) — (13:48) 鋸山(14:23) — (16:55) 国境平 △

6月3日 ○→●

△ (7:10) — (13:18) 間藤 ■■■ 桐生

夏合宿（薬師原～栗駒山）

7月20日～8月3日

メンバー

C I 須永守（3M） S I 篠崎厚（3M） 食料 加藤真知子（3C） 気象 陳親博（2L）
記録 片柳節男（2P） 食料 井上栄典（2E） 装備 高橋茂雄（3M） 医療 柴崎英久
(3K) 川崎喜孝（3M）

7月20日 ◎

桐生(6:30) ← 小山(8:15) ← 新庄 → 鵜杉(4:30) — (5:28) 薬師原 ↗₁

低気圧が、近づいてもいるが、薬師原まで行き様子を見ることにして、出発する。ほぼ1日間の汽車の旅を終わり、無人駅である鵜杉に着く。ここで天気図を取るが、台風6号は関東地方に上陸し、東北方面に向かっている。このまま進めば、直撃される。決定は明朝の天気図待ちとして、テントを図る。雲は低く、雲量は10/10、動きは遅い。

7月21日 ◎ 風強し

台風の勢力が弱く、登山道が整備されているので、進むことにする。薬師原上部の快適な牧草地を後にする。登り始めた辺りで、二匹のムササビに出くわす。これから先、神室山までの指導標は完備していて、登山道の具合いも良好である。新庄市役所からの地図によるテン場は、火打岳から約45分の神室寄りに指導標があり、稜線から10分である。6テン4張は可能である。水も少ないのである。植相は八森山までが広葉樹のかん木帯、八森山からは、笹及び低かん木（はい松等）である。所々草原状の所もあるが、花は少ない。台風の影響で風は強い。

タイム

↗₁ 薬師原(6:30) — (10:07) 八森山：食1(10:40) — (12:34) P1051▲ —
(3:03) 火打岳(3:20) — (4:06) 導標：テン場分岐(4:11) — ↗₂ 火打岳テント場

7月22日 ◎ キリ強し、風強し

↗₂ (5:20) — (8:14) 小又山(8:40) — (9:39) 天狗森(9:56) — (12:13) 神室山(12:17) — (12:20) 神室山避難小屋 ↗₃

東北地方と関東地方では、例年、東北地方の方が一週間～二週間梅雨明けが遅れるが、今年は変則的で、逆って梅雨明け宣言をしたため、早い梅雨明けであったが、東北地方では、台風の影響か、残り梅雨か天候が定まらない。合宿前半の天候は最初から当てにていなかったが、晴れていれば、日本海も見えるであろうが、残念である。天狗森山頂はやや広くなっていて、周囲は草原状である。この付近、草原の割合が大きい。神室山は、山頂付近、特に南西側が草原になって居り、日光キスゲが満開である。小屋は、西に伸びる尾根を1分程下った所にある。清潔な小屋で、毛布も用意してある。水もある。神室から軍沢岳までは、登山道ではなく、実際その通りであって、ヤセ尾根か、密ヤブの連続と言って良いだろう。ヤブの入り口は、小かん木のヤブであり、赤布があった。キリのため、先の

稜線を見通すことができず、資料も全くないために、不安である。

7月23日 ◎ キリ、風強し

△3

3:00 風強く、キリも昨日よりも濃い。5:00まで待つも、風おさまらず、沈でんとする。前神室に行く者2人。偵察に行く者3人。分岐から20分程、下って見るが、仲々視界は良くならず、50m位だろうか。尾根の状態は、広くて困るなどということはあるでなく、背の低く、ヤブで足元がかくされているので、うっかりすると、踏み外す恐れもある。ハイ松、石楠花、などの混生で足元定まらず苦労する。天気図では、明日はやや好天する気配なので、期待をつなぐ。

7月24日 ①

△4 (4:40) —— (4:43) 山頂(5:00) —— (5:19) 肩(ヤブ入り口) —— (7:30) —
P1158 (7:40) —— (11:05) 最低鞍部(11:15) —— (1:12) P1115 (1:40) ——
△5 P1140 手前 1120m付近

起きると同時に周囲を見るが星が見え、又、明けるに従って、周囲の山が見える。沈でん甲斐あり、稜線を見渡すことができる。県境の南、山形県、宮城県側は、雲海であるが北側に雲がないために、概略は見通せる。所々に、ぶなのこんもりした木があり、沢は急峻で、稜線直下からV字型に深くえぐられて落ち込んでいる。神室山頂で、しばし、展望を楽しみ、ヤブに入る。1.00h程下った所で、小規模な二重稜線にぶつかる。(1150m付近) 最低鞍部までに全部で4ヶ所あったが、ほとんどがその中心にあたる所に、大きな木があった。このために二重稜線ができるのか、それとも広いから大きな木が育つかわらないか、原因はこの地方特有の、多量の積雪であろう。最低鞍部は、ヤブの一番密な地域であり、つると細く背の高いかん木の混生である。東北地方と言えば、夏は関東よりも涼しいと、一般的には思われがちであるが、標高千m内外のヤブ山では、その暑さは、変わりはない。最低鞍部からは、山形県側に、伐採の跡らしきものも認められる。冬路沢は650m付近まで、林道が入り、飯場が見える。問い合わせ時の、最上営林署の植林事業であろう。冬路沢、夏路沢とも避難路として、適当である。最低鞍部から、P1115.6まで、可能性がある。水は5より、西に15分でとれた。(冬路沢源頭)

7月25日 ①

△5 (5:52) —— (8:45) 1153P (9:02) —— (11:58) 軍沢岳 (12:40) —— (2:40)
△6 軍沢川源頭 990m付近

P1153手前付近は、比較的藪が多く、藪も疎らであるが、越すと又、笹が多くなる。軍沢岳手前の小ピークは、5m先は見えない程の密生した笹ヤブである。軍沢岳の登りも大したもので、枝が横に伸びているのを、だましながら、あるいは強引に突破する。三角点も捜すのに時間をとられる。何しろ平らであり、見通しもきかない。軍沢岳からは、東側に寄って進み、尾根への降路を誤らないようにする。軍沢川の源頭は、水が取れる。

7月26日(休) ○

△6 (5:25) —— (10:00) 鬼首峠 △7

今回の合宿で、資料もなく、不安であった。神室山から軍沢岳までを、無事に、通過でき、先ずは一安心と言う所であるが、又、後でヤブコギの心臓を味わうこととなる。

荷上げ品は、無事であった。荷上げ品確認後、近くの沢に行き、裸になって、垢を落す。ここまで予備日を2日使っているため、虎毛山での休養日を、今日の半日の休養日として、振り変えることを決める。

コースの様子は、ブナが多く、下草も少なく、かなり楽であった。Kが途中で、鼻血を出しが、すぐに止まる。尾根上は、けもの道らしき感じが少しする。神室山からここまで山菜（こごめ、フキ、ウド、アザミ）などがテント場ごとに手に入った。誠に東北らしい。

7月27日金 ①

△ 7(5:03) — (9:13) P1087.9 手前(11:00) — (12:20) — (12:55) △ 8
(3:30) P1097 先のコル

予備日を1日使ってしまい。更にこれからも、楽なコースだということもなく、張り切らざるを得ない。県境を示す標柱から、登り始める。虎毛山は、登山道もあり、沢登りの対象ともなっているので稜線上の踏み跡を期待していたが、残念ながら、400m程で消えてしまう。P950を越すと、稜線が途切れがちになり、P970までは比較的下草（笹）も薄いので楽である。コルは笹が多く、他の低かん木は見られないが、P957の登りでは、ブナ等の高木に混じって、歩き易い程の下草があり、登るにつれて、かん木が多くなる。P1087.9 手前に露岩がある。危険はない。傾斜がきつくなるが、はい松などにつかまって登る。P940方向（南）にも露岩が望まれる。県境の屈曲部からは、P1086～P1097の絶対的に平らな尾根が望まれる。などと言っても何にもならず下降にかかるが、地図で見る程、不明瞭でなく、尾根はまちがい様もないが、藪は、残雪の豊富なことを思わせるような、細く、張力の強い曲があった、高木であり、結局、間を縫って行くしかない。コルは比較的ヤブも薄いがP1086に近づくにつれ、鈴竹が多くなり、高木も姿を失くす。P1086～P1097 までは、絶望的な、鈴竹の密生であり、ブナが散見できる。又、鈴竹のない所は、つると低木などが混生している所もあり、楽ではない。平らであるだけ、先の見通しがつかない。この稜線で仙台山想会の赤布を見る。P1087はそれ程、笹もなく、下るに従って、ヤブがひどく、コル付近は、テン場を捜すのに苦労する。何とか、整地して6テンと4テンの余地を作る。水は、西側に下り20分位であった。コルから見ると、虎毛の稜線は、遠目に、なだらかで、優美を感じるが、美女程、隠した爪は、鋭いものである。ここまで来ると、各メンバーの服装も、垢にまみれ、又、ヤブに裂かれて、ひどいものである。今回の失敗点の一つであるが、あきれたことに、縫い物に時間が取られるのである。

7月28日土

△ 8(6:35) — (9:18) 虎毛山肩(10:00) — (11:45) 小草原(12:03) — (12:33)
P1280(1:05) — (2:43) △ 9 P1280 先のコル

尾根の東側は、岩場記号があるが、草付きで、大した危険もなく、笹ヤブもあるが、そのものよりも、笹から落ちる細かい粉末で、のどをやられて、かぜの様な、症状を示すものが居て困った。稜線の1240m付近に出て、虎毛山頂を望むが道らしいものは、見当らず、かん木と笹で埋め尽くされて

いる。小屋が見えたが、その付近は資料にもあったように草原とお花畠なのであろう。歩き始めて間もなく、小さな草原に出会う。すでに、周囲には、木が侵入し始めている。ヤブは笹と、つるが少ないだけ歩き易く、又、丈の低い所もあり、昨日よりは楽である。所々踏み跡みたいな所もあったが、不明である。下りにかかるが、山頂と定める点が、明らかでなく、稜線の続き具合と方向で確認して、下る。コルは見通し悪く、ザツクがヤブにとられて、歩きにくい。水は春川方向に下るが、あせっていたため仙北沢方面に下ってしまい時間を取られる。主流まで下るが、伏流して居て、取れず、途中のたまり水を使う。現在位置が不明のため、コールを呼び合ってかえる。

(要3:30)

7月29日 (日) ◎

△9 (5:55) — (7:59) P1238 (8:12) — (10:13) 登山道 (1:15) — (2:16)

△10 P1237 のピーク付近

昨日のテント場はP1238の2つ手前のピークであって、テントとしては比較的良い方だろうか。P1238までは、迷うことなく、ヤブも笹も少なく。細いが高木が多いので歩きやすい。P1238の下りで、ナタのケースを見つける。登山道と出会う地点から、須金岳よりに、100mでテント場のある草地に出会う。水場は、不明である。P119 1.5からP1237までは、良く整備されている。大森平からP1237を経て、寒場に至る道は、良く整備されている。我々は、東工大の資料にある小草原をテント場に予定していたが、ピーク付近のヤブにテントを作る。水は昨日の経験から、登山道を下って、寒場方面の沢でとる。P862の下にも、水場はあるが少なく、尾根東側の沢に至る登山道を下った。

(所要 4:30 h)

7月30日 (月) ◎

△10 (5:55) — 草地 — (8:16) 寒湯 — (11:00) 岩入 (鎌内沢分岐 (8:55) —

(5:00) 湯浜温泉 △11

昨日からの、天気図の様子では、低気圧が2日後に、更に、今日が予定では、集中であり、明日からの行動は、予備日内の行動となり、沼沢沼を通っても3日はかかり、ギリギリでもあるので、東工大の資料では難かしくなさそうであるが、断念して下ることにする。バスは鳴子から大森平までで、その奥はないようである。奇しくも、43年度の夏合宿と道を一にするわけである。鎌内沢の自動車道は、宮城県側よりの自動車道と合して、湯浜温泉まで通じようとして居り、もう完成しているであろう。湯浜温泉は、家が二軒あるだけの湯治場であり、混浴である。夜は、おばちゃん達と風呂に入る。

夏合宿では始めてであろう。畑にテントをはる。

7月31日 (火)

△11 (5:45) — (9:37) 虚空蔵山手前の草原 (10:15) — (11:05) 集中 (御室の草原)

△12

集中する前に全員、ユニホームに着替えさせる。コルを越せば、御室の雪 があり、なつかしい顔とテントがあった。最初のコールで、皆、駈け出してくる。予定以上の差し入れに、本隊は満足そう

であった。

8月1日 (火) ◎

△13 定着

予定通り、今日は、付近の散策とする。スケッチを始める者、空きカンをつぶして、付近の清掃に、熱中する者、トカゲを決め込む者、遠征するもの、いろいろである。

8月2日 (水) ①

△13 (5:08) — (7:17) 昭和湖 — (8:00) 須川温泉 (8:45) — (10:50) 一関駅
(11:02) △ (5:14) 桐生 群大：コンバ (6:35)

今日は、天気図で予想した如く、雨であった。栗駒山が別れを惜しんで泣いているのだろう。しかし、雪けいの登りは嫌なものである。昭和湖は雨に煙り、須川温泉は湯けむりの中にあった。他の大学の合宿とぶつかり、荷物だけ、須川高原センターの好意で、一関まで運んで頂く。

リーダー反省

今度の夏合宿は、参加者が少ないことが反省点に挙げられる。原因は故障者が多いということであるが、その前段階として、普段のトレーニング不足があり、従って、平地合宿と赤城競歩がぶつかって、故障続出となつた

秋 合 宿 (三ヶ峰隊)

足尾 三ヶ峰～笠ヶ岳～錫ヶ岳～三俣山

9月30日～10月4日

馬坂、大島、品田

9月30日

桐生 △ 沼田 — 切通し — 1180m △

10月1日

△ (7:15) — 峰山 (12:35) — 三ヶ峰山 (14:30) 最低鞍部 (15:45) △

10月2日

△ (5:50) — (9:05) 笠ヶ岳 (10:10) — 錫ヶ岳 (12:20) — 柳沢の水場 (14:10) △

10月3日

△ (6:30) — 宿堂坊山 (8:50) — 三俣山 (13:05) — 日向山手前鞍部 (集中地) △

10月4日

△ (6:00) — 松木沢 (7:20) — 足尾 (12:30)

昭和48年度個人山行記録

(地域) 白毛門～笠ヶ岳

(期間) 48年5月19日～20日

(メンバー) 藤田

(コースタイム)

5月19日 ①

桐生(17:47) ■■■ 18:27 新前橋(19:04) ■■■ (20:21) 土合

5月20日 ①→○→●→○

土合(4:20) — (6:50) 白毛門(7:40) — (8:35) 笠ヶ岳(10:05) — 大倉尾根

— (11:20) 湯檜曾川 — (12:10) 芝倉沢出合(12:25) — (13:20) 土合駅

(15:05) ■■■ (17:08) 桐生

土合駅で夜が明けるまで仮眠する。駅前の八重桜は満開であった。4時には明るくなり出発する。白毛門の登りはいつもの通りであるがタムシバの花が咲いていたので、単調な登りも飽きなかった。笠ヶ岳までは雪渓があり、また石楠花が美しい。大倉尾根の道の分岐は頂上の手前5分程で縦走路より西方にのびている。道は細くて笹におおわれている為に獸道のような感じだが、はっきりとしているので迷う心配はない。湯檜曾川に出る付近、特に最後の100m程の高度差は急で木につかまらないとおりられない感じであった。また湯檜曾川には橋がないので約100m程下流の浅い所を選んで渡渉したが雪解け水の為増水しており、膝まで水に浸かった。あとは土合駅まで湯檜曾川に沿って良い道を歩った。大倉新道は下山用として利用する価値はあるが、登山用には利用すべきではない。

(藤田 健司記)

○尾瀬 6月2～3日 小林

○尾瀬ヶ原 7月17日 小林、馬坂、関口

○霧降高原 8月9日～11日 片柳、部外者4人

○尾瀬 8月17日～18日

篠崎、部外者3人

○清津峡 10月21日～22日 小林

○白馬～八方尾根 8月13～15日 加藤、部外者2人

8月13日 ○

桐生(18:43) ■■■ 高崎(12:10) ■■■ 松本(23:45)

8月14日

松本(3:45)→(5:01)白馬(5:35)バス(6:00)——白馬岳頂上村當ホテル
(13:00)△

8月15日

△(5:45)——(8:25)天狗山荘(8:45)——(14:00)唐松山荘(15:00)——
——(17:15)八方池山荘(17:20)——(18:00)ゴンドラ(18:15)——バス(18:35)
——(18:40)白馬(19:37)→松本(21:29)→(7:15)桐生(16日)

○湯ノ小屋—至仏山—会津駒ヶ岳

8月16日～20日

永島、綱川、石関(数)、後(数)

8月16日 ◎→○

桐生(6:35)→水上——湯ノ小屋(10:10)——(13:30)分岐(14:00)——
(17:05)△

8月17日 ○

△(6:25)——笠ヶ岳(10:35)——(12:30)小山沢田代(12:40)——(13:50)
至仏山(14:35)——(16:50)山の鼻△

8月18日 ○

△(8:10)——(12:50)三条ノ滝(13:20)——上田代——(17:15)御池△

8月19日 ○

△(5:25)——(9:23)大津岐峰(10:10)——(11:35)駒の小屋△

8月20日 ○

△(5:50)——(8:45)=会津田島→桐生

○越後駒ヶ岳—平ヶ岳 8月24日～28日

柴崎、山口(昌)、高橋(京)

8月24日 ○

桐生(22:22)→(4:15)小出(5:40)=新枝折峰(7:30)——(8:00)
明神山(8:23)——(10:04)小倉山——(12:50)駒ヶ岳小屋△

8月25日 ①→○→●

△(4:30)——(5:20)天狗平(5:30)——(7:50)中ノ岳(9:00)——(11:05)
兎岳(11:23)——(11:50)大木上山(12:20)——(15:15)△

8月26日 ● 沈澱

8月27日 ○→●→○

△(5:25)——(7:10)藤原山(7:20)——(10:45)剣ヶ倉山(11:00)——
(12:55)平ヶ岳△

8月28日 ①→○→●

△ (7:00) — (7:15) 姫ノ池 (7:20) — (9:05) 台倉山 — (9:40) 鷹ノ巣入口

(9:50) — (12:57) 船着き場 (14:00) — (16:00) 銀山平

○ 苗場山 (2年生だけの山行)

10月7日～8日 網川、陳、永島

10月6日～7日 ○→●

桐生 (22:32) ■■越後湯沢■■ 川 — 下の芝 — 中の芝 — 上の芝 — 神楽峰 — 苗場山 △

10月8日 ●

△ — 川 — 越後湯沢 ■■ 桐生

○ 八ヶ岳 (夏沢峠～赤岳～編笠山)

10月10日～12日 馬坂、大島

10月10日

桐生 ■■ 小梅 (13:02) = 稲子湯 (13:55) — (16:45) 本沢温泉 △

10月11日

△ (6:15) — 硫黄岳 (8:00) — (10:35) 赤岳 (11:40) — 権現岳 (13:50)
— 青練小屋 (14:40) △

10月12日

△ (7:00) — 編笠山 (7:20) — 小淵沢 (10:35) ■■ 小海 ■■ 桐生

昭和49年度合宿記録

春季リーダー養成合宿

○ 稲荷山 — 御荷鉾 — 雨降山 4月2日～5日

永島、斎藤(教)、黒崎(教)、野口(教)

4月2日 ①

桐生 (7:33) ■■ (8:22) 高崎 (8:30) + + + (9:30) 下仁田 (9:40) — (12:15)
茂垣 (12:20) — (13:40) 稲荷山手前コル △

4月3日 ①

△ (4:55) — (5:20) 稲荷山 (5:35) — (12:00) 赤久繩山 (12:30) —
(14:30) 塩沢峠手前の分岐 △

4月4日 ①

△ (6:00) — (7:36) オドケ山 (7:45) — (8:57) 西御荷鉾山 (9:20) —
(12:19) 東御荷鉾山 (12:35) — (14:54) 林道との出合 △

4月5日 ○→●→①

△ (7:00) — (7:32) 雨降山 (8:00) — (12:10) 塩沢 (12:23) — (13:44)

藤岡(14:24) 桐生

○天丸山 三国山 4月2日～4日

戸部、片柳、塩島、池上(工)

4月2日

前橋(7:07) ■ ■ (7:57) 藤岡(8:17) — (9:30) 八幡(10:30) — (11:02)

野栗沢(11:07) — (15:15) 赤岩峠 ↘

4月3日

↖ (6:25) — (11:45) 天丸分岐(12:05) — (5:45) 西沢分岐手前 ↖

4月4日

↖ (6:35) — (7:10) 西沢分岐 — (7:45) P1658m — P1618m(12:05)

(15:50) 三国山

○飯島 二子山 神ヶ原

陳、大崎、羽鳥、石関

4月2日 ①

前橋(8:20) — (車) — 飯島(10:35) — (12:40) 父不見山(12:45) —
(13:00) 長久保山(13:10) — 坂丸峠(13:50) ↘

4月3日 ○

↖ (7:25) — (11:32) 二子山(13:00) — (15:00) 叶山・志賀坂峠分岐 ↘

4月4日 ○

↖ (8:17) — (8:40) 分岐(8:45) — (9:03) 叶山(9:47) — (10:00) 分岐
(10:02) — (10:40) 間物(10:53) — (11:40) 神ヶ原(13:55) ■ ■ 前橋
(15:33)

新人歓迎合宿(赤城山)

1. 永島、黒崎、生出、加藤、新田
2. 前原、後、平井、角田、陳、池上
3. 片柳、小見、壬生、北村
4. 仁木、野口、大島、長島
5. 三橋、石関、上原、山中
6. 紺川、斎藤、島田、加藤
7. 牧、塩島、小林、馬坂、小堀
8. 牧志、吉田、室谷、石崎、吉野
9. 金子、羽鳥、赤堀、内田
10. 戸部、大前、何内、望月

4月28日 ①→○→●

・ 大河原 8:40 — 11:40 鍋割山 12:14 — 12:48 荒山高原 12:55 — 13:55 荒山
14:04 — 15:12 小沼

かなりゆっくりとしたペースで歩く。前年と同じコースである。ファイヤーの時は風強く、雨が降りだしたので途中で切り上げ、テントの中に入る。ねるころになると一層風が強くなり、張り綱は切れ、ポールは曲り、続々とテントは倒れた。3つのテントだけが立っていた。彼らと壬生氏以外のパーティは付近の売店に避難する。ガスのため視界は10mもない。

4月29日 ○→①

8:35 — 9:32 登山口 — 11:00 黒檜山 11:35 — 12:40 大沼

昨夜のことを考えて鈴ヶ岳を行くのをあきらめる。駒ヶ岳を経て黒檜山へ行く、途中から恒例のランニングとなる。

(陳 親博記)

工学部新人合宿

白根 - 国境平

陳、牧志、大島、生出、室谷、島田

5月3日 ①

湯元(10:55) — (11:35) 白根沢(12:10) — (14:55) 前白根(15:12) —
(15:40) 避難小屋

5月4日 ①

小屋(6:24) — (9:43) 錫ヶ岳(10:25) — (12:12) 2040P(12:23) — (13:33)
宿堂坊西鞍部(14:22) — (15:50) ヤジの水場

5月5日 ○→●→①

8:45) — (9:56) 三俣山(10:00) — (12:05) 国境平

5月6日 ○

8:12) — (9:13) 松木沢出合(9:24) — (10:28) 小足沢(10:40) — (13:40)
足尾ダム(13:50) — (14:30) 間藤

5月3日

Mが桐生で乗りおくれたので、日光に1時間ほどおくれて着く。東武日光駅から湯元行きのバスはすぐ出ている。白根沢が登れそうなので遅れをとりもどすため登る。残雪はかなりあるが、しまっている。途中から雪のない夏道を歩いて前白根に着く。五色山と前白根の山頂だけは雪は消えていた。まだ五色沼は氷が解けていない。雪の上を30分ほど歩いて小屋に着く。2軒の小屋には数パーティが入っていた。水は五色沼まで汲みに行かず、あたりの雪を解かした。

5月4日

6時半に小屋を出発する。凹地を左側にまいて稜線に出る。この間はあまり雪はなかった。晴れているので景色はばつぐんである。ここで昼食、錫ヶ岳の下りから雪がゆるみはじめ、みなすべりおりて

しまった。宿堂坊の鞍部までくるとまだ時間があるのでパンを食べヤジの水場まで行く。ササの上にテントを張る。

5月5日

朝はゆっくり出発した。ここからは樹林帯で、三俣山までくるとこれ以後はほとんど雪は解けていた。途中からキリ雨になる。東側が切れ落ちている場所があったが、プレートを追って歩く。国境平手前の鞍部から雨が降り出す。雨の中を国境平へと急ぐ。雪はところどころあった。ほぼ同時に到着した。先頭を歩いたので下半身はびしょぬれであった。全コース中、わかん、ロングスパツツ等はほとんど不要であった。

(陳 親博記)

袈裟丸一国境平

綱川、片柳、河内、荒川、須永、武井

5月3日

桐生(6:38)→(7:57)沢入(8:00) — (10:48)寝釧迦(11:32) — (14:00)
小丸(14:10) — (14:25)袈裟丸避難小屋

5月4日

△(5:00) — (10:21)奥袈裟(10:40) — (14:09)六林班峠

5月5日

△(5:15) — (6:58)鋸山(7:13) — (9:25)皇海山(10:00) — (12:05)国境平△

5月6日

△(8:12) — (17:07)桐生

5月3日

寝釧迦のすぐ手前で、道は二つに別れ、西側を行く。賽ノ河原の手前の避難小屋は、7~8名泊まれる。小丸からは、袈裟丸連峰、日光白根山、男体山などが一望できる。今日は残雪はほとんどなかった。

5月4日

残雪のほとんどない前袈裟の急な登りをゆっくりと登る。奥袈裟の下りから残雪が多くなる。法師岳手前のコルから尾根が広くはっきりしなくなる。水は栃木県側へ15分程下る。

5月5日

鋸山までは快調に進んだが、下りの急斜面に残雪が深い。皇海の下りも雪があった、途中で雨が降り出し、国境平につく頃は全員ずぶ濡れになった。そこで第1パーティーとばったり出合った。顔を見合せお互いにヒツクリ。

(綱川 猛記)

新人強化合宿

○谷川岳馬蹄型

牧医、齐藤教、藤江教、桜井、高橋

5月31日～6月1日

前橋(23:03)→(2:55)土合(4:00)→(9:25)谷川岳(10:25)→(14:05)

武能岳→(14:40)蓬峰△

6月2日

△(5:50)→(10:15)朝日岳(11:05)→(13:25)白毛門山(13:48)→
(17:08)土合(17:18)

○谷川岳 万太郎山 永島、金子医、綱川、池上、内田教、赤石教、安藤教、市川工1、 川島工1

6月1日 ①→●キ

土合(3:55)→(11:40)オジカ沢の頭(11:50)→(12:40)大障子避難小屋△

6月2日

△(5:20)→(6:28)万太郎山(6:38)→(10:12)仙の倉山(11:08)→
(11:35)平標山(12:30)→(14:55)元橋(15:40)→越後湯沢→桐生

○白毛門 卷機山 片柳、陳、生出、加藤、石井教、須永、野口教、竹野教、小堀工1、梅山教

6月1日

土合(3:40)→(7:12)白毛門(7:22)→(10:22)朝日岳(10:47)→(13:35)
檜倉山→(17:00)柄沢山を越えた湿原△

6月2日

△(4:12)→(6:46)卷機山(牛ヶ岳、割引岳ヘビストン)(7:00)→(12:50)
清水部落(13:27)→(14:15)六日町(14:26)→(16:43)前橋

浅草隊

月日 5月31日～6月2日

メンバー 石崎(CL)、牧志(SL)、壬生(医3)、竹ノ内(工1)、今井(看1)、藤田(看1)、森(看1)
大塩(工2)、小林(工4)

5月31日～6月1日 ②→●キ

新前橋(1:21)→(4:01)小出(5:36)→(6:23)大白川駅(7:13)→(7:33)
五味沢(7:40)→(15:25)浅草岳△

大白川駅前より音松荘のマイクロバスで約30分、五味沢に到着。五郎平で水をポリタンにつめる。浅草岳山頂までの水場はここが最後のようである。水をつめ約30分程後、道を見失しない、捗したが見当たらず待望のやぶこぎが始まった。霧雨の中ビショビショになりながら4時間余りやぶと戦いやく登山道を発見した。尾根を2つまちがえていたのである。その後道ははっきりしていた。浅草岳山頂付近は草原状で、テントサイトは山頂より大白川側にはんの少し下ったところにあり、かなり広かった。水は雪渓の水を使った。例年ない大雪のため山肌にはまだ多くの雪が残っていた。この日の行程は新人にとってはかなりきつい行程であったことと思う。しかし初めての山行で思いもせぬやぶの大歓迎はよい経験になり後の山行に大きな自信もついたことであろう。やぶの中の三人の女性(?)は上州女そのものであった。

6月2日 ①

△ (6:15) — (6:20) 浅草岳山頂 (7:25) — (9:55) 田子倉駅 (11:50) ■■■

■■■ (13:02) 小出 (13:52) ■■■ (16:18) 新前橋駅

山頂付近の雪渓でグリセード、シリセードをして楽しみ、甘い甘い氷アズキを食べさせられてしまった。下りは道がはっきりしていた。無人駅の田子倉駅から只見線に乗り小出に向った。只見線沿線の田んぼはもう田植えが終わり苗の緑が目をひいた。メンバー全員普段見られない、いなかの景色に疲れてねむい目をこすりながら目をやっていた。

(大塙 茂夫記)

夏合宿荷揚げ

メンバー：陳、綱川、永島

期日：7月15日（夜）～7月18日（早朝）

7/15～/16

桐生(22:00) — 須川着(9:05) 502.6 Km

須川(9:25) — (11:00) 大柳△ 523.1 Km

7/17～/18

7:00 — 7:25

7:30 — 7:55

8:00 — 8:40

8:50 — 9:20

9:45 — 10:20 荷下げ地

11:25 — 12:30 大柳

13:30 大柳 — (14:20) 横手 56.5 Km

横手(15:15) ルート13 (15:55) 院内 600.2 Km

| | |
|-------------------------|-----------|
| 院内(16:09) == (17:55) 鳴子 | 69 6.3Km |
| 鳴子(18:25) == (20:15) 仙台 | 77 8.8Km |
| 仙台(21:10) == (4:30) 桐生 | 111 0.1Km |

夏合宿（須川温泉～焼石岳）

7月22日～8月5日

メンバー

C L気象 陳親博(3L)、S L写真食料 綱川猛(3P)、装備 牧志勝男(3M)、医療片柳節男(3P)、装備 室谷尚大(2C)、写真食料 島田文夫(2E)、記録気象 生出広(2J)、医療 河内秀夫(2C)、会計 金子茂(2C) 須永 守(3M)

7月22日 ①→○

桐生(6:29) → (7:25) 小山(7:46) → (13:04) 一関(14:27) == (16:25)
須川温泉 ↗1

長い梅雨があけ、久しぶりの青空である。白河を過ぎたあたりから、雲行きがあやしくなり小雨が降り出すが、たいしたことではなく一関に到着した。駅前で昼食をとりスイカを食べる。そこから岩手県南バスに乗り須川温泉に向かう。バスが進むにつれて道は悪くなりいかにも田舎道といった感じである。16時に雨が降り出す。雨の中すばやくテントを張り明日からの行動のため19:30就寝とする。22:30頃まで隣りのテントがさわいでいた。やっとねたが、雨が激しく降り目がさめる。だいぶひどく浸水してしまった。

7月23日 ● → ○

雨は降っていないが濃いガスのため回復するまで待つ。天気図をとると2コの1008と6の低気圧の影響により天気は回復する見込みはない。時折、強い雨と共に雷鳴があり沈黙に決定する。昼食後、小雨の中一部の者は昭和湖方面へ、C L他数名はヤブの取付を偵察に行く。夕方、雨があがり、虹かかる。外に出てこれから縦走路方面を遠望する。

7月24日 ○

↖4:46 — 5:20 ヤブ取付 5:26 — 7:00 P1097 通過 — 10:26 昼食 — 14:55 P
1122 通過 — 15:55 ↗3

10分程進むと刈り込みの道あり、先が鋭いため転倒は危険である。P1097の登りは背丈の倍ほどのネマガリが密生している。ネマガリにツルが混じり進みにくい。まだヤブに慣れないせいもありピッチがおそくなる。都立大の赤布があり、ネマガリの間にヤブの大木がある。少しガスっていて東洋大探検部のプレートがあるが、字はほとんど消えている。以前濃いヤブに皆疲れた様子である。P1122手前は非常に濃いヤブで稜線の右側は急激に落ちこんでいる。テントサイトを探しながら行くが適当なT Sが見つからず、少しでもヤブの薄い所を探す。P1122と大薙山のコルの少し手前、

稜線から西側20m程下だった斜面のヤブの中である。本日の行動は12時間である。

7月25日 ◎

△5:12—7:25大薊山7:40—9:38昼食10:35—12:15P1067少し手前12:25—16:35△4

稜線に出ると風があり、ガスがかかっている。時折、青空が見える。背丈以上のネマガリであるが、7~8分でコルに着く。ネマガリの密生である。30分程で長いコルがこぎ終り、大薊山の登りにかかる。胸から肩程のヤブでピッチも相当あがる。一瞬ガスが晴れると斜面の下の方にピンク色のツリガネツツジが咲いている。大薿山はテント一張幕営可能である。今合宿初めてのプレートを取りつける。ガスのためトップが西へコースをとりすぎたのでトラバースに20分を要した。幅広い尾根の下りのヤブこぎは注意が必要である。OL, SL, S氏で偵察、一応尾根伝いに注意深く下っていく。15分程するとガスが瞬間上がり、ガスがなければこの下りはかんたんであることがわかる。コルを過ぎてから、ヤブも胸程となり薄くなる。ガスも消え、P1067の登りの状態がわかる。ヤブは比較的薄いが急登である。ピークは枝の密生したブツシユ地帯である。20分程背丈以上のヤブが続き、ブナの大木と胸程のクマザサとなる。テントサイトあり、小休のため視界は悪い。そこから北北東へ進む10分程でテントサイト最適の場があり、ちょっとした草原である。少し胸程のクマザサをこぐと踏み跡があり、ピッチはどんどんあがるが、数100mで踏み跡もなくなる。クマザサはほとんどなく草がはえている。コルをすぎたあたりで天気図をとり、10分程戻りTSをさがす。コルまで戻らず20m程先の尾根上の明るいヤブの中である。

7月26日 ●→○→◎

5:20水くみ6:03—△6:35—8:05石滝山ピーク200m前8:15—8:53石滝山肩
9:20—12:20P1125 13:30—13:50△5

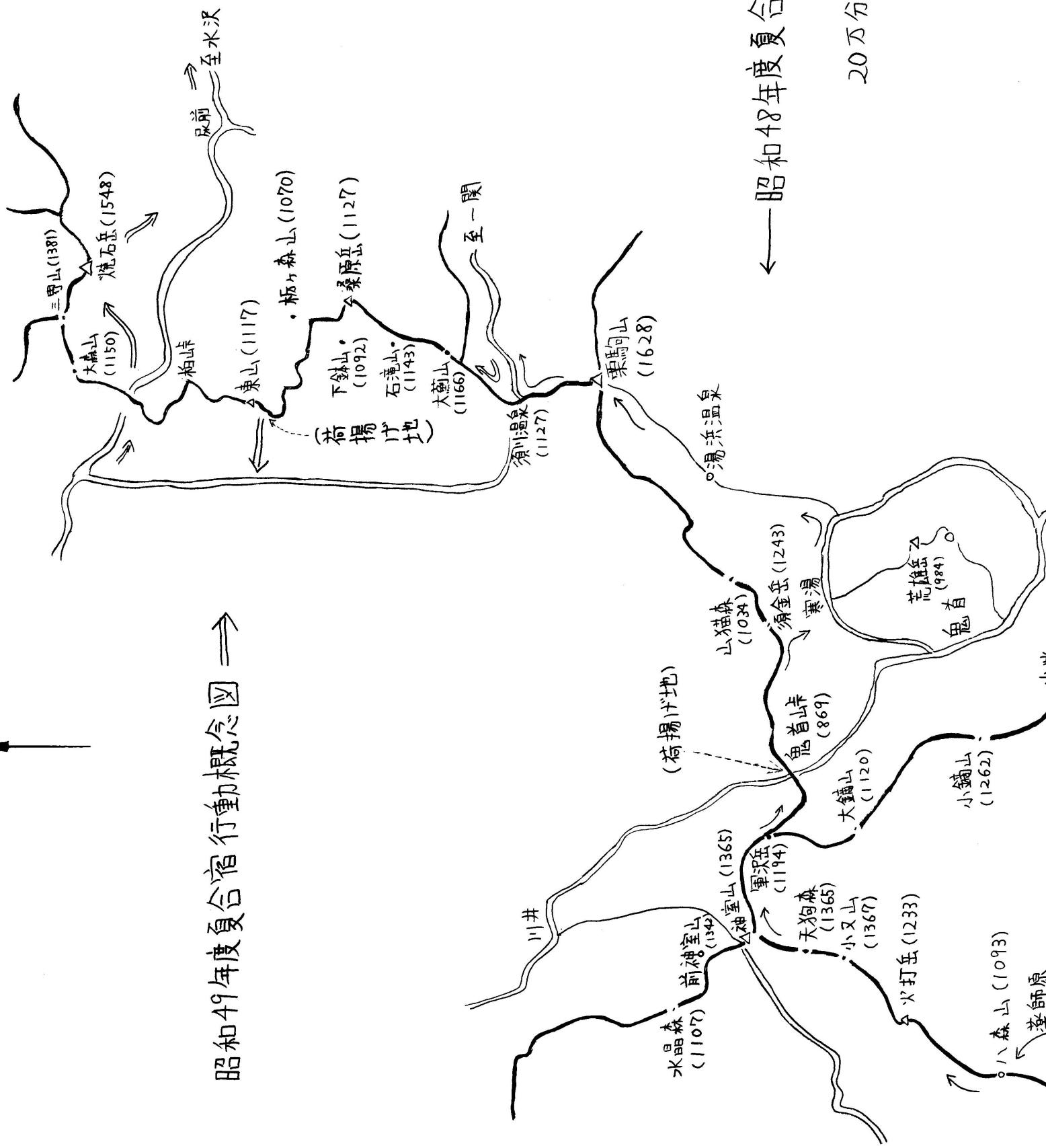
水がほとんどなく、小雨が止むのを待って水くみに出かける。尾根より西側を5分ほど下る。石滝山中腹でガスが晴れ、栗駒の山が見える。かなり太陽に照らされ、少し西へより日かけで小休する。登りであるが胸ほどの明るいヤブでこぎやすくピッチがあがる。肩の手前より稜線の西を歩く。肩からは焼石がよく見える。石滝山下りは中腹までブツシユとネマガリがまざり、中腹を過ぎるとネマガリが背丈以上となり稜線をはずれ、左へトラバースした。風もなくむし暑い。相当こぎにくく、北方へ別れる分岐にやっとたどり着く。ここで大休止とする。P1125は360°天望可能である。しばらく昼寝をする。O, K 2人でT.Sを探しに下る。コルはネマガリの密生地で、平らな所のネマガリを倒してT.Sとする。

7月27日 ①

△6:40—7:22上鉢山7:40—8:32 1146mP 8:44—11:53桑原岳の肩
12:30—12:40桑原岳12:58—14:03コル △6

出発するまでに2つの大きなドジがあった。背丈ほどのヤブで、皆キスリングも軽くなつたせいか、ピッチがあがる。おまけに、それ程暑くなく、風もあった。上鉢山はササヤブでなにも見えないが、幕営は可能である。下りは胸程のクマザサでこぎやすくピッチがあがった。10分でコルに着いたが、

昭和49年度夏合宿行重力概念図 ⇒



← 昭和48年度夏合宿行重力概念図

20万分の 地形図

ヤブは濃く背丈以上のネマガリでピッヂはおちた。1146mPは胸以上のクマザサである。ここから桑原岳山頂付近まで濃いヤブである。山頂に赤布・プレートをつける幕営可能である。コルまで行くが適當なT.Sなく、数十m戻る。水は北方へ7~8分下ったところである。

7月28日

△ 4:55 — 7:00 1065mの分岐通過 — 14:48コル △7

比較的こぎやすく、1065mP手前に池塘があり、幕営可能である。分岐からは尾根が幅広く間違いやすいのでC.I. S.L.がトップで行く。ちょっと行って木に登りルーフアイ、しばらく下ると前方を沢が横切り、尾根が切れ落ちガケとなっている。ルーフアイの結果、1065mPより右方に下りすぎ980m付近にいるらしいことがわかり戻ることにする。南へ10分程戻り、木に登りルーフアイもっと先に戻る。1065mP20m程手前でルーフアイ後、昼食とする。ルーフアイの結果地図の県境よりも西よりにコースをとる。この地形は平たく、尾根であるとは感じられない。実際にこの地形はあたかもドーム状になっていて傾斜は非常にゆるく、おまけに数多くの沢が入りこんでいる。ヤブは非常に濃く背丈以上で5m以上木に登らないとルーフアイできない。10:00出発、トップを交替したが沢の源頭付近を渡ってしまい先ほどの所に行き止ってしまった。時間をかけてルーフアイ後、1065mPまで再び戻る。県境の印を発見、少し時間をかけて検討する。少し北上し、その後沢を左からまくように北々西からつめて、数分ごとにルーフアイしながら進む。ネマガリが濃く、風もなくムンムンと暑い。ルートを北北西から北西にする。全員地図と磁石と地形とにらめっこである。非常に平らな下りで西によりすぎた感じで徐々に北々東よりにする。北々東に進んだが少し東により過ぎて最初の沢に合う。今度は同じ地点ではなく、一本沢を越した左側の尾根であるが行く手には同じ出合に流れこんでいる別の小さな沢があり、とうてい渡れそうにないので、この沢をまくため少し戻る。(13:55)やっとのことで脱出したが、又別の沢の源流の深いくぼみにぶつかる。そこは源頭まで戻って右岸に渡り、北北東~北東よりにルートをとる。14:34 T.M.U.W.V(都立大)の赤布を終に発見。14:48コル着。今合宿中最大の難所であった。扇型の尾根で、尾根といった感じはまったくなく、放射状に尾根がのびている。小さな沢が数多くあった。15:22水くみと幕営、水くみに行った3人がクマのフンだと騒ぐ。(地元の人の話でもこの辺にはクマが出ることもあるという。)全員一瞬緊張する。3人の1人は呼笛を2人は声を出しながら行く。しばらくしてKが大声を出したため、タイマツ、脱脂綿、ガーゼ etc を用意し、C.I.とS氏は3人の様子を見に行く。残った者は用心しながらテントを張る。何事もなしにやがて3人が戻った。水場まで下り3.4分登り5分で獣道がある。夜半雷鳴まじりの大雨でテント浸水(22:30)

7月29日 ●→○ △8

2:45起床、雨のため様子を見るが雨があがらず沈殿に決定する。4:30雨はしだいにあがるが風強くガスっている。天気図をとてから朝食にする。天気が回復し始め時折晴れ間が見える。十分に休養したので明日はできるだけ進むことにする。

7月30日 ◎

2:30小雨が降っているので様子を見る。6:30雨はあがり、これ以上の沈殿は計画を不可能に

するので今からでも柄ヶ森付近まで行くことにする。 Δ 8:30 — 9:13 1067mP 9:23 — 11:45 柄ヶ森山肩、昼食 12:35 — 15:45 Δ 9 (953m 手前のコル)

天気があまりよくないのでピッチをあげる。ネマガリに枝のはったツツユは比較的こぎにくい。背丈以上のネマガリが続き、1011m手前のコルは最悪である。1060m先の1030mPからの下りも広い尾根のため C.L. S.L. がトップに行く。相当距離的に進み小休する。1011mP手前のコルまでは比較的ネマガリが多く、柄ヶ森山の登にかかり胸程のクマザサとなる。顧みすれば、今来た稜線と南側の景色がよく見えすがすがしい気分である。柄ヶ森の肩まで1ピッチで登る。下りの途中からブナの高木に背丈ほどのクマザサでこぎやすくなる。上を見上げるとブナの木の葉が風にゆれサラサラ音をたてて気持ちがよい。平坦な尾根で、ブナの大木の下の明るいササヤブの中を T.S とする。

7月31日 ● → ○

2:30 起床、3:30 朝食後、少し雨がパラつき外もまだ暗くゆっくりパッキングしながら雨があるのを待つ。 Δ 5:23 — 6:28 953mP の少し先 6:40 — 7:10 ○ — 7:25 コル着、仮當 13:00 — 15:13 荷上げ地点着 15:50 — 15:55 Δ 10

しばらく行くと遠くに雷鳴が聞こえる。コルまで雷鳴の中、下ることにする。ふみ跡がある。木でポールを作りすぐに6天を仮當、全員ビッショリである。紅茶をわかして飲むが皆意気消沈である。すぐ近くで大きな雷鳴が聞こえ、激しい降雨である。天気図をとると寒冷前線の通過中で、もうしばらく降る模様である。時折、激しい雨、11:00 雨はあがった。腹がへったので飯をたく。しょう油とウメボシしかない。外に出ると寒冷前線通過後で非常に寒い。13:40 登山道に出る。道のありがたさは今まで背丈の倍もあるヤブをこいでできた者だけがじかに味えるものであろう。しかし、その道もくずれていてトラバス気味に進む。しばらく行くと登山道が2~3m程になり快調に進む。所々紙くず等が落ちている。荷揚げ品は無事であった。しかし、キャベツはくさり、人参はいたんでいた。T.S. によい所はなく、でこぼこのネマガリの中に幕営する。夕食は久しぶりのごちそうである。23:30 強風と豪雨でテント浸水

8月1日 Δ 11

2:30 起床、気圧の谷により、強風と共に大雨、しばらくガスっていて雨が降ったりやんだりしているが、午後からは雨は止んだがひどいガスである。夕食後、これから行動について話し合う。順調に行っても、あと4日はかかる。天気図によると低気圧が発生して数日後沈没する可能性あり、今合宿の経験から1日で回復するとは考えられない。同様に明日回復するとはかぎらない。最悪の場合明日から7~8日はかかると思われる。8/8~8/9になってしまふ。8/5~8/6までに集中しなければならない。以上をもって下山を決定する。

8月2日 ● → ○

2:30 雨、5:15 起床、小雨ぱらつき、ガス、夏とは思えぬ寒さ、視界20m以下、 Δ 8:02 — 9:32 車道入口 9:52 — 10:53 五里台 11:05 — 13:40 砂利碎石場 14:05 — 16:25 Δ 12

天候は回復せず、下山しなければ今日も沈没である。40分程下るとガスの下に出る。前方に人家あり、ずっとアスファルトの上を歩く。暑さのためかなりばてる。T.S. は車道より少し登山道に入っ

え川の淵である。ヤマアジサイが美しい。久しぶりにペグを使っての幕営である。川の水は雨のためだいぶにごっている。冷たい水で今までのよごれをおとす。夕方から着ていた物を1時間近くかかって焼却する。夕焼けが美しい。

8月3日 ◎

4:35起~~床~~ 7:03 — 7:38 3合目 7:45 — 9:50 沢 10:05 — 13:10 焼石山頂
13:48 ~~8~~ 13

寝ごこちのよく、すがすがしい朝であった。3合目で左の細い登山道らしき道に入ると人がほとんど通っていないらしく、両側からササがおおいかぶさり思わぬヤブこぎをする。30分で元の道に出たが、まもなく終点となる。規則正しく植樹された杉の中を登っていくと踏み跡らしいひどい道に入る。しばらく行くと良い登山道となる。沢のほとりで小休し昼食は草原の中である。山頂に人が立っている。8合目からはお花畠で高山植物が咲きほこり、野イチゴをつまみ食いしながら、ゆっくりと登っていく。沼のほとりには残雪とミズバショウが生えている。9合目、ゴロゴロとした岩の上を歩く。山頂は360° 天皇可能で広々としている。仙水沼のほとりに第2 Party のテントがみえ、気づいたらしく駆け登ってくる。記念撮影をする。T.Sでコーラ、スイカ等のさし入れを喰う。晩は沼に月が映ってたいへん美しく久しぶりにくつろいだ気分である。

8月4日 ◎

~~8~~ 11:54 — 12:43 銀明水通過 — 13:33 上沼通過 ← 13:58 中沼通過 — 16:35
尿前 18:17 = 19:03 水沢 21:44 ■■■

ずっとダラダラした下りで高山植物が咲きほこっている。上沼はブナに囲まれた静かな沼で、アヤメが咲いている。中沼は上沼より大きく、ぬかるみの中を歩く。林道を5Kmほど歩くと尿前に着く。

8月5日

■■■ 4:27 小山 6:26 ■■■ 7:29 桐生

解散後午後から群大でコンバ

(陳 親博記)

飯 豊 隊

期日：7月26日(金)～8月5日(月)

メンバー：C.L. 永島、S.L. 大塙、荒川、桜井、小林

7月26日 (金) ①

桐生(6:29) ■■■ (7:23) 小山(7:46) ■■■ (11:44) 喜多方(12:42) ■■■

(12:56) 山都(13:13) = (14:18) 川入(14:52) — (15:35) 御沢小屋 ~~8~~

予定通り出発。栃木でAとSが合流し5人となった。足利で山口(マ)氏、山都で山口(伊)、ウルセ氏による差入れがあり処分に苦労した。本日は登山口で列車の旅による疲れを取ることにした。

7月27日 (土) ①時々○

起床 (2:00)

△ (4:14) — (5:00) 下十五里 (5:10) — (5:30) 中十五里 (5:42) — (6:00)
上十五里 (6:11) — (11:00) 三国小屋 (11:10) — (12:30) 種蒔山 (1:05) —
(1:15) △

今日からが山への登りである。昨日の疲労が残っているのか多少バテている者もいた。中十五里には往復2分程の所に水場があった。またT.S.も有、上十五里もT.S.有。地蔵山頂にもテントを張ることができると、水は血池にきたない水が有るだけである。三国岳手前10分程の所にわき水の水場があった。本日は、最初の予定を変更し、種蒔山下の雪渓の所にテントを張った。

7月28日 (日) ①のち●

起床 (2:40)

△ (4:40) — (4:58) 切合小屋 (5:11) — (5:41) 草履塚 (5:51) — (7:19) 神社手前、鎌田氏に会う (7:33) — (7:43) 飯豊神社 (8:15) — (8:27) 飯豊本山 —
(8:45) — (10:21) 御西小屋 △

16:20 雨が降り始める。

23:00 ポールがたおれかける。

前方左に大日岳の雄姿が見える。このあたりからやっと、飯豊に来たという感じがしました。草履塚の向うには本山の姿も見えるのである。神社の手前で鎌田氏他4名のパーティーに会った。本山山頂からは、ほぼ360°の展望が開かれた。本日のテント場は御西小屋の前であった。夕刻から雨が降り、夜中にポールがたおれかかったりで、ほとんど眠ることができなかった。

7月29日 (月) ②時々○

起床 (6:05)

△ (7:10) — (7:42) 天狗の庭 (7:47) — (9:42) 与皿太郎の池 — (9:53) 梅花皮岳
(10:00) — (10:14) 梅花皮小屋 (10:59) — (11:27) 北服岳 (11:34) —
(12:27) 門内岳 — (13:03) 扇の地紙 (13:11) — (13:39) 地神山 (13:44) —
{(3:50~4:30) 天気図} — (18:40) 飯豊山荘 △

昨日の睡眠不足のため起床が遅れた。再び雷の中で過すのがいやなので本日下山を決定。初めはガスがかかっていたが次第に天気も回復し、視界がでてきた。お花畠の中を一路門内岳へ。このあたりからお花畠とも別れた。丸森屋根を下っている途中で夕立にあった。それにしてもこの尾根には閉口した。何と5時間弱もかかったのである。飯豊山荘に着いた時にはすでに暗くなっていた。

7月30日 (火) ○

起床 8:00

— (11:02) — (11:34) 小休 — (12:16) 小休 — (12:41) △

本日は昨日が強行軍だったので休養を取ることにした。飯豊山荘からバス停近くの農家の庭の片隅を借りてテントを張った。

7月31日 ◎時々

起床 4:30

△(5:58) — (6:12) 長者原(6:50) — (7:53) 小国(8:01) ■ (9:30) 米沢
(12:37) ■ (15:59) 横手(17:34) ■ (19:12) 北上△

本日は移動日である。米沢でこれからの食料を買出し、横手を出発するあたりから、雨足が激しくなり出した。そしてこの車中で北上より夏油温泉行のバスが出ている事を知ったのである。北上では駅助役さんの親切によって待合室で一夜を過すことができた。

8月1日 ①時々

起床 5:10

駅前(9:42) — (10:51) 夏油温泉△

北上駅前よりバスで夏油温泉へ。夏油に近づくにしたがってどしゃ降りであった。当然夏油もそうであった。雨の小降りの時を利用してテントを張った。ここには埼大ワングルもテントを張っていた。

8月2日 金 ◎時々①

起床 4:00

△(6:02) — (7:27) 沢(7:32) — (9:02) 1014P(9:11) — (11:48) 経塚山
(12:16) — (14:16) 金明水小屋△

昨夜来の雨もやんで、ガスの中を焼石岳に向けて夏油を出発した。二度目の買出しのため荷物の重さも増していた。全く人のいない道であった。今までの飯豊とは異なり林やササのしげった道を進むのである。経塚からは焼石岳が手に取れる程の距離に見える。本日は焼石手前の金明水泊りである。

8月3日 出 ◎時々①

起床 3:00

△(4:34) — (5:00) 牛形分岐(5:19) — (6:53) 東焼石岳(6:59) — (7:30)
仙水沼△

いよいよ集中予定日である。朝起きると、焼石岳の上に日が輝いていた。そして百尺の音色が聞える。とても風流であった。さて焼石めざして出発である。途中牛形尾根に道のあることが確認できた。東焼石付近ではガスが深くなつて来た。下界は雲海の下である。7:30に集中予定地仙水沼に着いたが、第1パーティーは到着していなかった。しかし、13:15ごろ山頂より人の声、第1パーティーの連中である。無事予定日に集中ができた。皆元気ではあったが、顔には無精ひげをはやしていた。とにかくくなつかしい顔ばかりであった。

8月4日(日)～5日(月) ◎時々①

起床 9:00

△11:53 — (12:42) 銀明水 — (16:36) 尿前(18:20) — (19:07) 水沢
(21:44) — (4:28) 小山(6:26) ■ (7:29) 桐生 — (8:22) 部室

本日は全員そろつての下山である。

(永島孝作記)

秋合宿(平ヶ岳)

月日：10月1日～5日

メンバー：綱川、永島、河内、金子、桜井、荒川

10月1日

桐生(：) ■■■(：) 沼田(9:15) タクシー(11:10) 鳩待峠(11:48) — (12:38)
山の鼻(12:53) — (14:50) 十字路

10月2日

(5:45) — (6:17) 温泉小屋(6:25) — (7:14) 三条ノ滝(7:30) — (11:50)
尾瀬口山荘(12:30) — (14:15) 清四郎小屋

10月3日

(7:10) — (11:20) 鷹の巣尾根(11:30) — (12:48) キャンプ場(13:25) —
(17:00) 姫の池

10月4日

風雨強く沈殿

10月5日

(5:30) — (6:05) 平ヶ岳(6:30) — (9:50) キャンプ場(10:20) — (11:
18) 鷹の巣尾根(11:28) — (15:50) 尾瀬口(15:55) 船 (16:30)、(17:55) 小出
タクシー前(18:05) タクシー(18:14) 小出(19:46) ■■■(20:32) 桐生

春スキーア合宿荷揚げ

10月20日 →

大塩、生出、大島、池上、島田、室谷

下宿(4:20) (6:40) 大清水(7:36) — (8:30) 一ノ瀬(8:40) — (9:02) 岩
清水(9:10) — (11:22) 長藏小屋(13:00) — (13:17) 三平下(13:30) — (14:
10) 一ノ瀬(14:15) — (14:55) 大清水 — 桐生

秋季リーダー養成合宿

○南八ヶ岳 11月1日～4日

室谷、金子、桜井、陳、大島

11月1日～2日 ①

桐生(10:45) ■■■(2:35) 小諸(6:28) ■■■(7:46) 小海 — 稲子湯(9:00) —
中山峠(13:05) — 東天狗(14:20) — (15:40) オーレン小屋

11月3日 ①

△(6:23) — 硫黄岳(7:55) — 赤岳石室(10:23) — 赤岳山頂(12:00) — (13:30) キレット小屋△

11月4日 ①

△(6:20) — 権現(7:35) — 青年小屋(8:34) — 編笠山(9:05) — (13:40) 小淵沢(14:42) □ 桐生

○越後三山 11月2日

河内、荒川、大塩、高橋、小林

雪が予想以上に多く、装備及び技術面の不足により、枝折峠より下山する。

リーダー養成合宿

中倉山～オロ山～庚申

期日 11月3日～11月4日

Member 生出、池上、島田、綱川

11月3日 ●→●

桐生(6:38) □ (8:31) 間藤(8:45) — (10:05) 防砂ダム(10:30) — (11:15)
中倉山東尾根 1070m (11:20) — (12:33) 中倉山中腹(13:10) — (13:45) 1499m
三角点通過 — (13:50) 中倉山通過 — (15:15) 沢入山越えた鞍部△

11月4日

△(6:30) — (7:54) オロ山(8:05) — (9:10) コル(10:00) — (10:08) 庚申山
頂(10:35) — (10:55) 岩場めぐりへの分岐 — (12:07) 宇大W.V小屋(12:17) —
(12:50) 一の鳥居(13:00) — (13:52) 銀山平(14:00) — (15:12) 原向(15:24)
— (17:04) 桐生

11月3日 ○→○

防砂ダムまでは道がついているが、そこから中倉への尾根に取りつく。やたらガレでいて過去の資料(70皇海)と同じく、比較的草木の生えている安全な尾根を登る。中倉東尾根に取りついてからは、非常に岩がもろく三点確保で慎重に登る。時折、自然落石があり風雨の時はとても登るのはむりであろう。がん場の途中、カモシカに出会う。中倉からはクマザサ帯でずっと道がついている。この頃より天気は雲り出しサイトに着く頃はガスり出す。沢入山を越した鞍部のサイトは一面クマザサ帯である。水はないとのことで本合宿では、ポリタン1人2本持って来るが、サイト南側に下った所で水がとれそうである。18:00 就寝

11月4日

4:30起床 オロ山手前は、ケモノ道らしき道がクマザサ帯の中にだいたいついていて、それをたどる。1680mから30m程は、カラマツのひどいヤブである。それを過ぎるとまた、クマザサ帯となり、遠く富士のシルエットが見える。ピークが近づくにつれだんだんヤブが濃くなる。今回は養成合宿である事も考慮して、わざとシャクナゲのヤブ帯をこぐ。オロ山ピークのひどいヤブの中に我部

のプレートを発見、オロ山下りからは、またクマザサ帯となり、木々の間に、シカの群を何度も見る。庚申からは、鋸ピストンも考えていたが、それをとり止め岩場めぐりをして一の鳥居に出ることに決定。岩場はクサリ場、ハシゴが多くチョットした醜陋味である。一の鳥居からは2時間30分もの間ただひたすら林道歩きである。

反省

来年度夏合宿に会わせ、ヤブを経験して見ようとしたが、期待していた程のヤブではなかった。尾根も1本で縦走路を誤る事もない。唯、最初のガレ場取つきだけを注意すれば、岩あり、ヤブあり、林道ありと、足尾ホームグラウンドの我部において、秘められたる山行として推奨したいコースである。カモシカに出会い、シカを何度も見たのは実に感激であった。

(生出 広記)

昭和49年度個人山行記録

- 根子 — 四阿山 6月16日
池上、石関医、島田、河内、宇敷(数)
- 西黒尾根 7月22日 加藤、尾高(O.B.)
- 苗場山 — 小松原湿原 8月23日～25日
大塙、生出、大崎(数)、竹野(数)、安藤(数)
- 白毛門 10月10日 綱川
- 谷川岳 10月20日 荒川、桜井、部外者2名
- 白樺尾根～蓮峠 10月26日 綱川、部外者1名
- 白毛門～蓮峠 10月27日 島田
- 庚申山 6月9日 生出
- 袈裟丸山 6月23日 小林、石崎医、仁木医、藤田(看)、森(看)、今井(看)、篠崎
- 尾瀬沼 6月16日 綱川、永島、部外者14名
- 尾瀬 8月8日～9日 加藤

パーソン

南アルプス縦走(甲斐駒～三伏峠)

8月10日～8月16日

高橋、小林、生出、大塙

8月10日、11日 ◎

桐生(20:00)→(22:29)新宿(23:55)→(3:39)塩崎(3:43)タクシード(4:05)竹宇駒ヶ岳神社(5:43)→(8:05)粥餅石(8:35)→(11:05)刃利天(11:25)→(12:20)屏風小屋△

8月12日 ◎

△(4:50) — (5:55) 七合小屋(6:03) — (8:20) 甲斐駒山頂(8:45) — (9:15) 六万石(9:22) — (10:30) 仙水峠(10:40) — (11:00) 北沢小屋(11:25) — 北沢長衛小屋11:40通過 — (11:53) 北沢峠(12:05) — (14:20) 蔦沢小屋への分岐△

8月13日 ◎

△(5:25) — (6:07) 小仙丈岳(6:25) — (7:22) 仙丈岳(8:10) — (8:37) 大仙丈岳下(9:00) — (11:55) 横川岳(12:05) — (12:37) 両俣小屋△

8月14日 ①

△(5:05) — (5:47) 左俣大滝(5:52) — (9:03) 北岳山頂(9:50) — (10:20) 北岳稜線小屋(10:30) — (11:00) 中白峰(11:05) — (11:55) 間ノ岳 — (12:15) — (12:38) 三峰岳(12:47) — (13:32) 熊ノ平小屋△

8月15日 ◎→①

△(4:40) — (7:03) 北荒川岳手前(7:20) — (7:40) 塩見岳手前コル(7:45) — (9:10) 塩見岳(10:03) — (10:35) 塩見小屋(10:46) — (12:15) 本谷山 — (12:20) — (12:47) 三伏小屋△

8月16日 ◎→①

△(4:30) — (6:12) 尾根取付(6:20) — (6:50) 塩川小屋(6:55) — (7:20) バス停(8:10) — (9:05) 伊那大島駅(9:46) ■■■ (10:42) 辰野(12:09) ■■■ 松本 ■■■ 高崎 ■■■ 桐生

8月11日

董崎からはバスも出ているが時間待ちがもったいないのでタクシーで竹宇駒ヶ岳神社に行った。そこで若干の仮眠をとり出発した。神社の後のつり橋を渡るとすぐ甲斐駒への長い登りが始まった。夜行列車の疲れからかスローペースであった。出発より2時間30分、粥餅石に着いた。五合小屋まではここが最後の水場となる。ここで昼食を食べてまた長い長い登りへ出発。4時間後今日のテントサイトの屏風小屋へ到着。水場は北西往復5分程度であった。水量は少なく大切に使用しなければならない。

8月12日

やっと甲斐駒頂上に着いた。それにしても長い登りだった。頂上はガスがかかっていて何も見えず。六万石に着くころには雨が降り出しカサをさしての下りであった。ここで出会った女性がKさんに似ていた。この日は予定を変更して仙丈山荘まで行こうということであったが、天候も悪いので、蔦沢小屋との分岐にテントを張ることにした。水場は小屋の方角へ往復20分程度であった。降り続いている雨も夕方頃上がり、夕焼けに染まった甲斐駒がすばらしく雄大に見えた。

8月13日

出発から約40分で小仙丈岳へ着いた。360度の大パノラマであった。富士山と北岳が天につきさるように肩を並べていた。仙丈岳への稜線は花も多い。仙丈岳よりバカ尾根を両俣小屋へと急いだ。藪沢の水場からは両俣小屋まで水場はなかった。テントサイトはテント場節約のためというよりビール代にするため、両俣小屋より野呂川左俣に入った北岳への登山道わきに張った。この日の夕飯のカレーがとてもうまかった。

8月14日

左俣の大滝で小休を終わり出発しようとした時、後から「群大生ですか」と聞かれた。その人の顔に見覚えはあったが思い出せず、聞いたところ荒牧の図書館にいる人であった。まさか南アで知人に会うとは……。その人と北岳まで一緒であった。北岳頂上でタバコをふかしている姿が我々4人に印象的であった。その人は女性か男性か、我々4人が知るのみである。その人より少し早く北岳を出発し間ノ岳へと足を進めた。間ノ岳でライチョウの親子に出会った。今日のテントサイトは熊ノ平小屋である。

8月15日

今日はいよいよ中間地点の三伏峠である。しかし気象通報では台風接近とのこと、今日天気図を取って判断をしなければならなかった。嵐の前のよい天気というか塩見山頂ではよい天気であった。三伏小屋に着いて天気図を取り、その結果台風は本州を直撃する恐れが強いため、残念ではあったが南アルプス南・北大縦走の計画は南部を残してここで中止し下山することに決定した。

8月16日

三伏峠から尾根取付までは猛スピードで下った。台風が来るというのにこれから登って行く人もいたが、どういうつもりなんかなあと、みんなで言い合っていた。バスは臨時が出て乗ることが出来た。

(大塩茂夫記)

雪と沢の記録

昭和48年度 春山スキーコンペ

期日 48年3月21日～29日

メンバー C.L 須永

1班 児玉、馬坂、海老沼、陳、山口明、加藤、金子

2班 蔦村、小林茂、渡辺、大島、品田、小林三、片柳、篠崎

3班 須永、壬生、山口昌、熊田、武井、石井、井野口

記録

3月20日 ①

教育 — 渋川(7:48) — (8:50) 長野原(9:00) — (9:50) 花敷温泉(11:00)

一 (17:00) 野反湖ヒュッテ

19日教育での買い物後、メンバー全員が合宿所に宿まり込む。卒業式前後の大学は、物騒である。朝、一番のバスで渋川に向かう。何事もなく花敷に着くが、待ち合わせている中村さんが、居なくて、チャータしたトラックのみ、先に到着。花敷から、白砂林道分岐までは、除雪してあり、そこで荷物を降ろす。近道もあるが、林の中であり、道路が除雪してある時には、道路を通った方が早い。分岐は花敷温泉より5km、左折するが、道標がある。雪の状態は、ヒュッテ付近で、1~2吹きだまりでは3~4m位であろう。湖は全く結氷したままで、白く雪に埋もれている。積雪1.0m強であろう。流水はなく、湖より運び上げる。ヒュッテの設備は、電気、ガス、石油ストーブ2である。暮営を思えば夢の如し。

3月21日 ①

早々と起きて、合同練習開始、まずは、ゲレンデ作りであるが、トレーニング不足が、身体にこたえる。しかし、春山の眺望は、それを癒すに十分である。一応ゲレンデも出来れば各インストラクターの出番だが、スキー場と異なり、仲々足さばきもままならない。

各班毎に、練習を行なうが、他班のことよりも、自分の事で、背一杯である。

3月22日 ①

遠征第1日、八間山、高沢山、恵比山の3コースである。

・八間山Party

ヒュッテ() — () 八間山() — () ヒュッテ

メンバー

C.L 須永 石井 井野口 武井 壬生 山口マ

ヒュッテ前の斜面に取り付く。雪は硬く、歩き易い。登るにつれて、パノラマが眼下に広がる。八間山のスロープは一見素晴らしいが、尾根筋には、雪庇が見える。尾根筋は、木があるために、雪が硬かく、腰まで潜る所もある。山頂からの展望は素晴らしい、富士山こそ望めないが、その数分で、登りのアルバイトも忘れてしまう。下りは尾根を西寄りにトラバースし、野反湖に向かって滑る。傾斜もきつく、上部は、藪に苦労する。

3月24日 ◎風強し

練習

3月25日 ◎風強し

練習

3月26日 ◎風強し (帰桐)

(須永 守記)

・高沢山Party

途中で恵比山のパーティと別れカモシカ平へ、ここの大斜面はすばらしい。

(陳 親博記)

浅間山

昭和48年12月27日 ○

大崎、生出、石井、小林(三)、壬生、石崎、陳、綱川、武井

桐生(5:36)——(6:20)高崎(7:00)——(8:10)中軽井沢(8:33)——(9:00)
峰の茶屋(9:20)——(9:45)小浅間との鞍部(10:04)——(11:32)2168mP(11:37)
——(13:20)小浅間との鞍部 ——(13:33)小浅間ピストン(13:55)——(14:22)峰の茶
屋(15:08)——(15:40)中軽井沢(16:08)——(17:20)高崎(17:35)——(18:
29)桐生

快晴、夜があけ、電車から浅間を見るとほとんど雪がない。峰の茶屋でスパツツをつける。樹林帯
以外ではほとんど雪がない。鞍部で朝食をとり、出発しようとすると、T氏とM氏がおくれてやって
きた。今日の状態ではスパツツのみで十分で、2000mまで1ピツチで行く。これ以上は登山禁止で
あるが、2168mまで登る。快晴のため景色は抜群。四阿山、横手山、苗場山、白砂山そして谷川連
峰がみえる。さらに平ヶ岳、日光、白根、足尾の山々も見える。頂上まで行けばアルプスの山々が見
えるのにと思いながら下山する。途中からT氏は沢ぞいにスキーで下山する。我々は昼食をとり、M
氏の講習による雪上訓練を行なう。ヒバーク用の装備を使わずによかった。ワカン、ストック等も持
っていた。

(陳 親博記)

大学山岳部リーダー冬山研修会

昭和49年3月1日～8日

2月28日 ①

桐生(11:06)——(11:45)高崎(12:44)——(5:30)富山(6:22)+++++(7:
20)立山 ——(7:22)研修所

10:30に試験が終わり、すぐ駅に向かう。一人旅は心細いものであると感じる。富山駅であり、
電鉄富山駅には研修所へ向かう数名に会う。研修所に着くとほとんどの研修生は到着していた。明日
は国鉄のストで今日中に来るよう連絡が前もってあった。

3月1日 ○

午前中は研修所で開会式とオリエンテーションを行なう。午後は講義があった。「積雪と雪崩」「
登山の装備」というもので、その後は体力測定などをやらされる。その後入山食について検討する。
私は8班であり、くじ運悪く班長になる。参加人数41名、32校で10班まである。

3月2日 ○

6:30起床、朝食後、講義「冬山気象」があり、天気図実習を行なう。体力測定の続きをやり、
午後からは裏のゲレンデでスキーの練習である。皆それほどうまくない。シールを付けて登る練習を
した。しばらくしてワカンで歩く練習をする。それから入山食を調達する。夕食後は講師とのミーテ

イングである。ヤルン・カン登頂の京大OB、エベレスト南壁、ブモ・リ登頂者等計10名であった。我々の班は中大OBの人である。今夜はスキーにシールを付けて寝る。予定していた人津谷・前大日岳周辺は雪崩のため、鉄崎山に行く。

3月3日 ◎

研修所(7:20)——立山(7:39)+++++(7:41)栗巣野朝、記念撮影をして出かける。栗巣野スキー場を経て大品山手前のコルに冬テントをはる。6時間ほどスキーを付けて登ると着く。スキーを付けているのでそれほど沈まないが、トップは交替で行く。

3月4日 ●→○

3時間ほど行動して、雪洞を堀る。10時ごろから4時間かかって作った。入口をツュルトでふさいで寝る。

3月5日 ○

朝、起きてみると、マツチがつかない。ツェルトをすぐはずす。今日はここから鉄崎山までピストンである。スキーをはいてジグザグで登って行く。途中でスキーをデポして、ピツケルとワカンに換える。スキーで登っている時のが楽に感じるが、他の連中は逆である。6時間程で山頂に着く。快晴で、すぐそばに薬師岳が、遠くに剣岳が見える。昼食後、アイゼンをはくべきところではないが、アイゼンにはきかえる。ここからザイルをつけてコンティニュアスの練習を行なう。1時間ほどそうしているとどうやら身に着いたらしい。その後はフィックスザイルの練習である。デポ地点でスキーにはきかえ何度もひっくりかえって雪洞までやってきたが、オーバースポンのポケットが破れ、中に入っていた地図と時計をなくす。ワカンにはきかえて2時間ほどさがしたが、見つからずあきらめた。

3月6日 ○→●

今にもありそうな中を出発、途中スキーがこわれたものがいたため8班はワカンにはきかえる。たしかにスキーをはいているよりも速い。極楽坂スキー場の手前で冬天をはる。雪洞の中でぬれたシュラフをかわかすが、むだであった。スキー場に近いのでウイスキーが手に入った。それを飲んでいると酔い、それをもって全員はだしでとなりのテントに向かう。8時ごろまで歌をうたう。ぬれたシュラフではねむれないが、シュラフカバーを中心に入れて、羽毛服を借りてどうにか寝た。

3月7日 ○

キスリングを背負ってスキーで滑りおりる。視界があまりきかない。ゲレンデまで来ると雪がしまって滑りやすい。1名ねんざした。研修所でウイスキーを飲む。昨日よりすすまない。しらけたのでねる。まださわいでいるところがあった。

3月8日 ○

みんなの前でラジオ体操をやらされる。順番に班長が前に出てやった。朝食後、研究討議を行なう。書記をやる。「遭難対策」と「新人訓練」についての討論である。後者の方に行くことになる、書記は皆の前で討議内容の交換を行なった。そして班長は反省会の時、前に出て反省を述べ、作った雪洞について説明した。昼食をとり、書記は討議内容をまとめて提出しなければならなかつた。今日中には帰れそうもないで夜行で帰ることになる。2時間もたてば、研修所内はほとんど人がいなくなつ

た。まだだいぶ時間があったので図書館で本を読んでいた。

立山(19:22)***** (20:20)富山(22:53)-----

3月9日 ①

(5:19)高崎(5:37)---(6:34)桐生

<研修会に参加して>

今のワンゲルにおいて積雪期の縦走は不可能に近かったので、スキー登山とはいえ、この研修会は、自分にとって有意義なものであった。技術的な面に関しては、やはり講習会でなく研修会であるということから考えても、基礎的なものの再検討にとどまっている。討論会においては、大学山岳部の問題点等を知り、また日本の最先端の岳人の1部に接することができたことだけで何らかの価値があると思う。

(陳 親博記)

昭和49年度春山スキー合宿(尾瀬)

昭和49年3月21日～28日

大島、川崎、高橋、武井、馬坂、加藤、須永、片柳、陳、綱川、永島、山口昌、壬生、志摩

3月21日 ①→⊕

桐生6:35---7:55沼田8:02---9:50戸倉10:53---13:06大清水---15:50
一ノ瀬

3月22日 ⊕

一ノ瀬7:20---三平峰9:38---長蔵小屋11:10

3月23日 ⊕→○→○

沼山峰へ全員でスキーに出かける。

3月24日 ⊕

午後、数名を残して檜高山にラツセル訓練に出かける。

3月25日 ⊕→○

全員で燧ヶ岳へスキーに出かける。

3月26日 ①

全員で小淵沢田代にスキーに出かける。

3月27日 ⊕

沈澱

3月28日 ⊕

小屋8:00---三平峰9:34---一ノ瀬11:45---大清水1:10---3:25戸倉4:55---6:50沼田7:24---桐生8:45

3月21日

戸倉から大清水までは地面が露出していた。柳沢までは除雪してある。途中N君が不調であったが、

数時間はいっしょに行動できた。天候は下り坂であるが、一ノ瀬に近いので2隊に別けて行動する。途中雪の降る中で天気図をとり、先発隊より、1時間ほど遅れて1ノ瀬に着く。1ノ瀬の小屋があいていたので、今夜はここに泊る。

3月22日

昨夜の降雪量は10cm。若干歩きにくいのでトップを交替しながら、三平峠までくると、雪が降りだした。今まで以上にもぐるので、スパツツをつけた方がよかったです。小屋を交替で掘り出す。雪が降っているので午後は行動せず。

3月23日

昨夜の降雪量50cm、2時間の停滞の後、沼山峠に向う。2回ほど滑るとみんなあきた。直滑行でもスピードが出ない。小屋に着いてしばらくくたつとY氏が来る。

3月24日

昨夜の降雪量50cm、この雪の中をS氏は急用のため下山。T氏とY氏が見送る。午後になっても雪はやまなかつたので、裏の山にラツセル訓練に出かける。少し遅れて行ったが、すぐ追いついてしまつた。ワカンをつけてもひざをも没するぐらいの中を1時間以上かかって山頂に着く。数名はスキーで下り、残りのものは同じ所を下る。

3月25日

雪が少し降っていたが燧に向う。我々より早く数パーティが燧に向うのを見る。おかげでラツセルはかなり楽であった。途中小さななだれの音を聞く。コルにスキーをデボして山頂に向う。昼食をとり下山の途中なだれの音を聞く。10秒近く続いた。雪まみれになりながら全員無事に小屋に着く。

3月26日

今日は珍らしく朝から晴れている。檜高山を経て、小淵沢田代に向う。前回よりも、ラツセルはかなり楽で1時間かからず着く。そこからスキーで下り、途中でゲレンデを作り、スキーの練習をする。そこから2時間ほどで小屋に着く。

3月27日

昨夜から雪が降り続き今日は初の沈黙日となる。だが数名は裏山へスキーに行く。

3月28日

まだ雪はやまないが、風はないので、下山する。三平峠から全員スキーで下る。2時間で一ノ瀬、ここまで除雪してあったにもかかわらず滑れる。30分で大清水、2時間で戸倉に着く。戸倉の手前で数名はスキーを脱いだ。途中からは一部分に雪があっただけで、その上をどうにか滑った。

(陳 親博記)

卷 機 山 スキー

S 4 9 . 4 . 13 ~ 14

メンバー C L 須永 武井、渡辺、大塩、山口昌男 (O.B.)

記録 5月10日(金) ◎

(桐生)(11:30) — 沢口

桐生より車で、沢口まで入り、沢口のバス待ち合い所で、仮眠する。今の時季では、沢口までは、完全に除雪されているが、清水までは、確かではないので、旅館に宿まるなら清水まで入っても良い。

5月11日(土) ①

沢口(5:00) — 清水(7:03) — (12:03) 本峰(1:15) — (4:30) 清水 — 桐生
除雪は3日前に終わったばかりということであり、車道は、深さ3m程の雪のトンネルの中に行く。雪だけ水で道が良くない。腹をこする。

和泉屋の横の駐車場に車を置き、朝食もそこそこに出発する。和泉屋の付近で、雪が2m位あって、山頂から、駐車場まで滑走可能である。東大の山荘あたりは雪に埋もれ、抜群のゲレンデであり、天狗岩、割引岳、似巻機のピーク、米子頭、柄沢山などが、誠に近く望まれる。雪はしまっていて、潜ることもなく快適な尾根歩きとなる。似巻機直下からは、谷川連峯、苗場、石打の裏の山々が、薄いモヤを通して望まれる。概して谷川の、気象の悪いのに比べ、冬を除けば天候が安定しているようだ。山頂でしばし昼寝など楽しみ。又、TとOは、牛ヶ岳までピストンをする。山峯は、風のためか、雪が少なく、這松が出ていた。五月の明るい陽光の中、自分達の他には誰も居ない大斜面を滑る。一人遅れがちなのは私。ショートスキーは山スキーには非常に有利である。注意すべきなのは、900m~1100mまでの斜面と1300m~1400mの間の尾根である。前者は急で、登るのも降るのも恐しい。登りはスキー靴はやめた方が良い。

(須永 守記)

白ヶ門山

8.4.9.11.19~20日



陳、大塩

11月19日 ①

桐生(17:49) — (18:34) 新前橋(19:07) — (19:28) 土合

11月20日 ①

△ 7:07 — 10:28(P) 10:40 — 12:08 山頂 12:15 — 14:57 土合

11月19日

土合をおりたのは我々を含めて3名であった。数日前雨が降ったせいか駅前はほとんど雪がなかった。指導センターへ行くのをやめ駅に泊めてもらう。

11月20日

最終列車のスキー客の到着で目が覚めたがまた寝る。十数名いた。5:30に起床、雲がほとんどなく、これから登る白ヶ門は一部岩肌が見えるだけで白銀の世界である。100mほど登っても雪はほとんどなく、400mほど登ってやっと雪山らしくなる。もはや谷川岳は真白である。森林限界を越えると雪はグーンと多くなり、ピッケルも完全に没してしまう。山頂手前の急登のラツセルはたい

へんである。山頂では若干の風が吹いている。景色は抜群で、燧ヶ岳、白根山、四阿山等ほとんどの山がみえた。雲の動きがはやく、晴れたり曇ったりしている。

(陳 親博記)

浅間山

期日 S 49 12月27～28日

Mem: 陳、生出、大塙、大崎、平井

12月27 ○

桐生(8:34)——(9:27)高崎(9:36)——(10:56)中軽井沢タクシー峰の茶屋(11:15)——(11:55)小浅間と鞍部△

浅間山ピストン

△(13:05)——(14:05)避難小屋(14:10)——(15:15)山頂(15:27)——(17:00)サイト着△

12月28日 ○

△(11:40)——(11:55)峰ノ茶屋通過——(12:55)グリーンハウス通過——(13:47)中軽井沢(14:32)——(15:44)高崎(15:56)——(16:44)桐生

12月27日

恒例によって12月の浅間山行を計画した。今年は冬テントを新たに講入し、それを使用してみるため一泊することにしたが、車中から眺める浅間は、ほとんど雪がなく土がだいぶ現われている。中軽井沢から乗ったタクシーの運転手の話しても今年はあまりまだ、雪が降らないとの事である。昨年も雪が少なかったが今年はそれ以上である。峰の茶屋からは、スパッツもつけずに楽に小浅間と鞍部に到着。鞍部で昼めしを喰っていると2人連れの登山者が浅間から下ってくる。(後で知ったのだが、それは山岳部の連中であった)空は真青、穏やかな日のため今日浅間山頂に登ることに決める。冬テントを張ろうとするも雪が少なく、竹ベグは使はず石拾ってきてベグの代用として何とか冬テントを張る。その後、すぐ浅間山頂を目指して出発。最初の樹林帯の辺りでは少し雪があるが、樹林帯を抜けると所々土が見え始める。一気に2168Pの肩まで登ることができる。

さすがにそこを越えると、雪の表面が凍り始めている。その上風もだいぶ強くなる。第二火口の地点で、オーバズボン、スーパーヤツケを着用して、強風の中山頂をめざす。

第二火口跡から15分をらずで山頂につくが、風が強くじっとしていられない。岩影に身を隠し、少し休んだ後、記念撮影をしてすぐ下ることにする。山頂からは、風が強いが360°長望ができる。奥秩父、北アルプス、四阿、苗場、谷川連山、日光、足尾、皇海山 etc までの大パノラマである。下りは雪のある所で、滑落停止などの練習をするが、うまく滑べらず無理の様である。それでも何とか自ら、メビードをつけて練習をしながらゆっくりと下る。テント場につく頃には、月明りが、我々5人のシルエットを作り出し始めていた。

12月28日 ○

昨日、山頂まで登ったため、再度試みる意志なく、おそらく寝ている。今日は帰るのみである。
時間もだいぶあるし、金も節約のため、中軽井沢駅まで歩いていく。

(生出 広記)

足尾・不動沢右俣

S. 48.8.11~14日

陳、山口昌)

8月11日 ①

桐生(6:38)——(8:20)通洞——(10:45)銀山平——(12:05)——の鳥居(12:48)
——(14:00)宇大山荘(14:18)——(16:15)境沢手前

通洞からタクシーで銀山平へ行く予定であったが、歩くことにした。そのため予定していた六林班峠までいけなかつた。やっとのことでの鳥居まで着いたところでサンダルから地下足袋にはきかえる。林道を歩いた疲れと、暑さのためか登りがかなりくたびれる。どうにか宇大の山荘までつき、しばらくして偶然にもY氏がねむそうな顔をして出てきた。ちょっと話をして、我々は先をいそぐことにした。1620m付近の地図上にない、平坦な道を歩く、15:28分かなりくたびれて来たので、水とテン場を捜したが、この沢は枯れていた。10分ぐらい下ったが水はなさそうなので、ひっかえてまた歩くことにした。15分ぐらい歩くと水のある沢に出会う。ここをテント場にした。これよりも前の沢はほとんど枯れていた。

8月12日 ①

(6:25)——(8:10)六林班峠(8:48)——(14:45)砥沢部跡(14:57)——(15:
21)1100m付近

4:35分起床、6:25分出発、境沢で休む。まだ平坦な道である。六林班峠からささのおおいかぶさつた道をしばらく下っていくと五兵衛に着く。なお下っていくと沢に出たのでワラシにはきかえる。この付近は魚がないらしく釣糸をたらしてもまったく反応がない。途中の水たまりの岩かけに20cmほどのイウナを見つける。苦戦の末やっとつかまえる。さらに下していくと部落跡があり、まだ使用可能である。20分ほど歩いて砂地があったのでここをテント場にする。Y氏が釣りはじめてしまらくたつと30cm以上のイワナが目の前を通り岩影に身をかくした。20分ほどの水中の苦戦の末、ものにした。

8月13日 ①→○

(6:45)——(7:20)砂防ダム(7:31)——(7:41)円覚付近(7:51)——(8:00)不動
沢(8:20)——(16:37)皇海山頂(17:00)——(18:11)国境平

4:30起床、6:45出発。砂防ダムをまくと、眼下に10数mの滝がある。上半分はナメ状である。円覚手前で不動沢が見えたので下って行く。この沢は木暮理太郎の「山のふるさと」に書いてある。ゴーロをしばらく行くと、長さ十数m、落差5mのナメ滝が2本あった。10分ほど歩くと長さ10m

落差数mの滝がある。12時すぎに右俣と左俣の分岐に到着する。右俣の方が水量は多かった。
1600m付近でコースを左にとりすぎ、1850mのコルに到着せず、皇海山頂に直登することになる。
かなりの急斜面で三点確保を強いられる。1900mをこえると山頂までヤブこぎである。

8月14日 ○→①

△(8:56) — (9:26) ニゴリ沢(9:34) — (10:50) 三沢(11:40) — (1:20)
砂防ダム(1:25) — (2:55) 間藤 ■■■ (5:00) 桐生

6:55起床、モミジ尾根を30分で下り、ニゴリ沢に出る。三沢の出合で昼食をとり、ダムのところでサンダルにはきかえた。
(陳 親博記)

昭和48年度秋合宿 3party(沢登り)

S.48.9月30日～10月4日

メンバー

C L 須永 陳 井上 渡辺 (A班)
(S L 武井 綱川 牧志 山口明 (B班))

記録

9月30日 ①

桐生 ■■■ 沼田 — 切通し — 仮小屋

10月1日 ① {ス沢 A須永、陳、井上、渡辺
前小屋沢 B武井、綱川、牧志、山口明

Aパーティー

ス沢(3:30h, LT含む) —

出合には堰堤があり、1250m付近まで、ゴーロ帯とナメ滝の連続となる。中流に15m、上流に10mの滝が1つづつ。出合よりニグラ尾根まで3:30 帰りは1925Pに至り、沢の東の尾根を下り、2:00であった。

10月2日

宿堂沢(4:10)

大岩沢との出合いより20mの滝で始まり、左岸を高巻く。中流はスラブ及びナメ滝であり、1550m付近に左高巻きの必要のある30mの滝がある。廊下状の内部である。紅葉が日に映えて美しい。15分程の轟きで鞍部に至り大岩沢に行った。Bパーティーと合流した後、宿堂坊山を経由、三左衛門沢南の尾根を下る。

10月3日

国境平集中

10月4日

帰 桐生 ■■■

(須永 守記)

足尾松木沢上流・皇海沢

S49.6.30 (日) ○→●

メンバー CL.須永 山口昌男 (OB)

地域 足尾松木沢上流 皇海沢

記録

6月30日

桐生(5:00)——(6:30)松木(6:43)——(7:44)御沢出合(7:55)——(8:55)シナノキ沢出合(9:05)——(11:55)稜線(12:10)——(12:57)皇海(1:12)——(2:00)国境平 — (4:30)松木 — 桐生

昨夜のコンバの疲れで寝ている部員の中で、起こさないように出発する。大間々で早くも、フロントガラスがぬれ始める。二人とも睡眠不足であり、辛い。松木まで行くが、幸い天候は好転せずとも、悪化する気配もない。出発。荷物らしい荷物もなく、ピッチが早い。今頃の沢でも、ぬれると寒い。水量は多いが、股までは来ない。濁沢出合で鹿に会う。末だ小鹿であり、ふしきそうにこちらを見ていた。皇海沢はここから始まり、その概観は、松木沢及び濁沢と異なり、滝こそ2ヶ所と少ないが、明るく、変化に富んでいる。シナノキ沢、皇海山への遡行記録があるが、出合からでは、ほんの入口しか望めない。この周囲にも、公害によるらしい樹木の枯死が見られる。唯一の滝らしい滝は、4m程で、シナノ木沢出合から300m付近である。右岸をまく。もう一つの滝は、更に200m上流である。ナメ滝で何のことともない。鋸のピークから派生する尾根は、沢に至る前で大きな崩壊を形成し、その恐ろしさにぞっとする。この辺から、睡眠不足が、効き始め、10分のヤズときで枝原に出る。皇海山と鋸山の中間のピークの真中に出了。雲はどんよりして、山頂で降り始める。眠さを雨に、紛らせて、一気に降る。充実した山行であった。

(須永 守)

足尾・小田倉沢・三重泉沢

S.49.8月11日～15日

メンバー CL.須永 SL.陳、OB.山口マ、鎌田

8月11日 ①

桐生よりY氏の車で、林道終点に至る。三重泉沢出合の橋より上流右岸にベースを張る。

8月12日 ① 小田倉沢より津室沢(7:20)

(6:00)——(7:55)小田倉沢出合(8:15)——(8:45)ドーム型の滝——(10:20)
880m南より沢——(11:56)1230北より沢——(12:25)唐松殖林帯——(12:48)尾根
——(1:45)左岸のまき道——(2:15)二段(5+10m)——(3:15)出合

あぶが非常に多い。たき火をすれば追い払えるがその時だけで効果は残らない。小田倉沢出合までは

河原歩き。小田倉沢は、800m付近から滝が現われ、900m辺りまでかなりの頻度であり、後は沢幅も狭く、楽な感じである。延間峠より平滝に至る林道は全く、根跡も無い。狼が住むといわれる小田倉沢だけれど、特別に変わった徵候もなし。津室沢は小田倉に比べて、滝の数こそ少ないが、落差は大きく、40mに達するものがある。一つは1000m付近、一つは出合い直前である。巻道はすべてについている。

8月13日 ① 滝の沢右俣 (12:49)

△ (6:26) —— (1080m付近) 廊下上の滝 (ロープ左岸) —— (8:20) 出合い —— (9:27)
2段40m (左岸をまく) —— イワナ漁 —— (10:40) 両俣の分岐 —— (11:40) 1600m ——
(1:45) 穂線 —— (7:15) △

滝の沢500m付近が廊下状で良くないが紅葉の頃ならば素晴らしいだろう。釣り人が1P先行している。滝の沢出合から40mの大滝までは、ナメ滝が爽快である。大滝はさすがに豪快で誠に素晴らしい。一段目の滝っぽまで行ける。左岸を巻く。やや悪し。Yが岩魚を見つけ、Cが素手で捕る。美味なり。右俣、左俣の分岐は、10:1で左俣が少なく、明るく開けている。しばらく気持ちの良い沢歩きが続くが詰めの轍が長くそして濃い。三ヶ峠を経て1645.6のピークに至る尾根を辿り、直接ベースに下る。尾根を下るタイミングを誤らないよう注意。このコースは、夏でも1日では難しい。

(須永記)

昭和49年度 秋合宿 (沢登り)

S49.10月1日～5日

A隊 C.L.陳、大塩、島田、室谷 B隊 C.L.高橋、生出、池上

10月1日 ◎→①

桐生 (6:38) ■■■ (8:32) 間藤 (8:42) —— (10:13) 昼食 (10:52) —— (14:26)
ニゴリ沢出合 (14:37) —— (15:03) モミジ尾根 —— 16:16 国境平 ▲

10月2日 ●→◎→①

沈殿

10月3日 ◎時々 ●

沈殿

10月4日 ① (A Party) 広沢

△ 7:47 —— 8:47 湯の沢出合 8:51 —— 8:59 赤根沢出合 —— 9:15 広沢出合 9:20 ——
10:37 5本の沢の出合 10:58 —— (13:53) 皇海山頂 (14:17) —— 15:06 ▲

10月5日 ①

△ 6:54 —— 7:21 ニゴリ沢出合 7:31 —— 9:07 ウメコバ沢出合 9:21 —— 11:18 足尾
駅 12:54 ■■■ 桐生

10月4日 広沢 (A Party)

鈴小屋沢左俣を下って1時間ほどで、湯ノ沢出合、さらに20分ほど下ると赤根沢出合を経て広沢出合となる。ゴーロ帯が続き、何本かの小滝がある。沢が5本に分散している地点まで1時間ほどでくる。一番左側の沢に入るとスラブの連続で快適である。一度登ってみる価値がある。途中で引きかえし、予定通り、左から二番目の沢に入る。10分ほど歩くと、6, 5, 4 m の滝の連続である。これらは楽に直登できる。次にあらわれたのは15 m の滝で、直登は可能であるが、全身びしょぬれになりそうなので左岸をまく。その上流に落ちる10 m の滝は、直登できないこともないが、我々のパーティの力では不可能である。そして15 m、5 m の滝があるが、左岸をまく。これ以後、スラブの連続であるが、所々、落石のためうまっている。しばらく行くと岩壁が張り出している。直登可能である。左に進むとガレに達する。落石に注意しながらツメると、草付になり、数m歩くと道に出た。本峰より西方五分地点である。これより皇海に登り、国境平にもどる。湯の沢流域の今回の合宿においては、広沢が一番魅惑的であると思われる。広沢の5本の沢への期待は大である。

(陳 親博記)

B Party

10月4日 湯ノ沢

部 員 住 所 錄

1975年12月現在

現住所・帰省先

| | | | | |
|--------|-------|----------------|--------------------------------------|--------------------------------|
| 武井 昇院 | W 2 | 〒376 370-31 | 桐生市菱町黒川2351-5辰美莊 群馬郡箕郷町柏木沢2049 | 44-4055小林方 027399-2241有4294 |
| 馬坂 達男 | 院 P 1 | 376 | 桐生市仲町3丁目15-15 同上 | 44-9174 |
| 綱川 猛 | 4 P | 376 | 桐生市新宿通り1丁目432 同上 | 44-9042 |
| 片柳 節男 | 4 P | 376 372-0 | 桐生市仲町2丁目14-13太田方 栃木県安蘇郡葛生町中1140 | 43-0802太田方 02838-5-3271 |
| 永島 孝作 | 4 P | 376 | 桐生市相生町2丁目364-15 同上 | 44-4641 |
| 須永 守 | 4 M | 373-01 | 太田市大字成塚674 同上 | 0276-37-1525 |
| 陳親博 | 4 L | 326 | 足利市栄町1丁目3360 同上 | 0284-21-7962 |
| 河内秀夫 | 3 C | 376 | 桐生市本町5-62 同上 | 47-2246 |
| 桜井克美 | 3 C | 370-04 | 太田市藤阿久240-19 同上 | 0276-25-2514 |
| 荒川法子 | 3 P | 328 | 栃木市室町8-3 同上 | 0282-22-0403 |
| 大塙 | P | 376 | 桐生市菱町黒川2351-5辰美莊 新潟県三島郡越路町来迎寺 | 44-4055小林方 02589-2-2863 |
| 池上 荣 | 3 E | 371 | 前橋市川原町375-70 同上 | 0272-31-4219 |
| 島田文夫 | 3 E | 327 | 佐野市赤坂町86 同上 | 0283-3-8944 |
| 生出 広 | 3 J | 376 321-34 | 桐生市菱町黒川2351-5辰美莊 栃木県芳賀郡市貝町赤羽3511 | 44-4055小林方 028568-4621 |
| 竹之内 敏一 | 2 C | 376 389-11 | 桐生市錦町3-4-38周東高夫方 長野県上水内郡豊野町大倉1996 | 026257-3513 |
| 川島 幸江 | 2 P | 376 374 | 桐生市天神町2-8-4 館林市岡野339 | 22-9478 杉戸方 02767-4-2361 |
| 市川妙子 | 2 S | 371 | 前橋市元総社町336 同上 | 0272-52-4359 |
| 小林一郎 | 2 L | 329-41 | 足利市小俣町127 同上 | 0284-62-2761 |
| 吉野博文 | 2 L | 376 360 | 桐生市錦町3丁目4-38 熊谷市久下530 | 0485-22-0192 |

O・B 住 所 錄 員

1975年12月現在

(勤務先住所)

| | | | |
|-------|----|-----|---|
| 久保田 昇 | 40 | E | (不明) |
| 宇田川 紘 | 40 | E | 日本サーボ 桐生市相生町3-93 T 576 桐生市相生町5-154-2 日本サーボ社宅D-3号 T 376 |
| 奥原功 | 40 | C,D | 群栄化学工業 安中市下秋間1498-3 T 379-01 |
| 岩下佳司 | 41 | W | 日清紡 静岡県藤枝市善左エ門1433 日清紡藤枝 T 476 |
| 新井靖衛 | 41 | C | 東洋パルプ 広島県呉市広町彌生198-8 東洋パルプ彌生社宅2-6 T 737 |
| 大島隆夫 | 41 | C | (不明) |
| 浅海瑛二 | 41 | S | 栃木県公害防止管理協会 宇都宮市睦町22県営住宅3-44 |
| 鳥居寛治郎 | 41 | M | 千野製作所生産技術科 藤岡市森字天神1 群馬郡榛名町甲942-2 |
| 見供滋忠 | 41 | M | 三菱油化KK 三重県四日市市小古曾4-5 三菱油化社宅11-202 |
| 鳩原恵二 | 41 | E | 東芝電器具前橋工場開発部第四技術課 前橋市古市町180 渋川市南町2536 T 377 |
| 秋草洋三 | 41 | S | 平岡織染草加工場 埼玉県草加市松江町703 T 340 (不明) |
| 藤村孝道 | 42 | S | モーリン化学研究所 館林市富士見町13-1 T 374 栃木県足利市駒場町770 T 329-42 |
| 内田邦夫 | 42 | M | 神戸製鋼所本社環境技術課 兵庫県明石市大道町2-10-24 みのり荘3号 T 673 |
| 朝倉正博 | 42 | E | 芝浦電子製作所部品技術課 埼玉県浦和市町谷520 埼玉県浦和市町谷510 芝浦電子社宅 T 338 |
| 大塚光守 | 42 | E | 東芝電気器具前橋工場第二技術課 前橋市古市町180 前橋市古市町東芝電気器寮 T 371 |
| 鹿山公 | 42 | S | 興国化学工業KK 太田市龍舞町2070 |
| 小林弘一 | 42 | C | 明成商会東京営業所 東京都中央区八重洲2-1 井田ビル2(有) 東京都太田区田園調布3-46-3 明成寮 T 145機3課 |
| 田沼正也 | 42 | M | 日立製作所日立研究所 茨城県日立市西成沢町一丁目8-4-104 成尺アパート56棟 T 316 |

| | | | |
|--------------|---------|---|---------|
| 深 沢 鼎 | 4 2 | 桐生工業高校定時制 勢多郡柏川村前皆戸 14 | 〒371-02 |
| 川 田 祐 一 | 4 3 W | 堀田産業 栃木県足利市元学町 823 | 〒326 |
| 黒 田 宏 | 4 3 C | 埼玉澱化学工業 埼玉県浦和市大字辻 埼玉県浦和市埼玉澱化学工業 KK 浦和工場寮 | |
| 小 島 昭 | 4 3 S | 群馬高専工業化学科 桐生市本町 4丁目 338 | 〒376 |
| 横 尾 国 夫 | 4 3 M | 横尾製作所 栃木県鹿沼市西沢町 385 栃木県鹿沼市西沢町 388 | 〒322-03 |
| 金 子 岩 男 | 4 3 K | 日東製粉 埼玉県草加市栄町松原団地 B-46-7 | 〒340 |
| 五十嵐 信 之 | 4 3 K | 東洋インキ製造 KK 埼玉県浦和市南浦和公園住宅 42-501 | 〒336 |
| 久 保 田 耕 司 | 4 3 K | 東芝セラミックス KK 営業部東京都千代田区内幸町 2-1-6 (不明) | |
| 藤 井 幸 吉 | 4 3 M | 油研工業 KK 研究開発課 神奈川県高座郡稲瀬町上戸櫛 2424 神奈川県伊勢原市高森 1690 東高森団地 5-302 | 〒259-11 |
| 斎 藤 讓 | 4 4 S | 群馬県衛生研究所 (不明) | |
| 原 文 雄 | 4 4 K | 日本酸素 KK 技術本部保安管理部東京都港区西新橋 1-16-7 東京都太田区池上 8-21-5 日本酸素安方寮 | 〒143 |
| [REDACTED] 茂 | 4 4 M | 東武鉄道 埼玉県熊谷市本石 1丁目 300 | 〒360 |
| 横 山 崇 雄 | 4 4 C | 倉敷紡積 KK 三重県津市江戸橋倉敷紡積男寮 | |
| 小 沢 達 樹 | 4 4 W | 桐生繊維試験所 前橋市小相木町 488-1 | 〒371 |
| 松 田 衛 次 | 4 5 L | 三洋自動販売機 KK 太田市内ヶ島 1574 | |
| 草 場 彰 | 4 5 院 E | 日立製作所戸塚工場 横浜市戸塚区舞岡町 115 日立第 1 アパート B 4 | |
| 中 島 好 司 | 4 5 S | 日本楽器 静岡県浜松市中沢町 7-5 日本楽器清韻寮 | 〒430 |
| 加 藤 芳 彦 | 4 5 W | 日清紡富山工場 富山県富山市堀 15 雄山寮 1 の 5 | |
| 山 田 定 男 | 4 5 M | 古河アルミ 栃木県小山市中久喜 1330 古河アルミ大谷寮 | 〒323 |

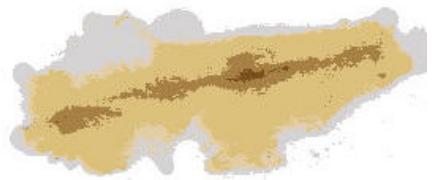
| | | | | |
|-----------|-----|----|-----|--|
| 上 山 | 悟 | 45 | K | 株) 大気社 東京都世田谷区経堂 5-28-20 |
| 埋 橋 | 文 人 | 45 | M | 日立製作所 栃木県下都賀郡大平町富田 500 大平寮 T329-44 |
| 根 岸 | 秀 幸 | 45 | M | ソニー 東京都江東区東陽 4 丁目 12 番 20-1213 T135 |
| 須 藤 | 誠 | 45 | E | 富士通 神奈川県川崎市多摩区宿河原 1072 向江莊 |
| 中 島 | 恒 彌 | 45 | E | 三菱電機 京都市右京区嵯峨二尊門前住生院町 6 |
| 木 村 | 隆 男 | 45 | 院 C | 電々公社通研茨城支所放射線高分子課茨城県那珂郡東海村 茨城県水戸市赤塚町 2090 電々水戸赤塚独身寮 T311-41 |
| 岡 部 | 宣 男 | 45 | S | (不明) 足利市板倉町 800 |
| 斎 藤 | 勝 男 | 45 | M | 群大工学部機械工学科日景研 |
| 滝 野 | 哲 司 | 46 | P | 沖電気工業本庄事業所製造技術部生産技術課 埼玉県児玉郡上里村七本木 3525-1 沖電気七本木寮 T369-03 |
| 高 橋 | 徹 夫 | 46 | P | 株) クラレ 愛媛県西条市朔日市 801-1 クラレアパート 7 号 |
| 堀 江 | 英 雄 | 46 | L | 富士通 神奈川県川崎市中原区上小田中 1464 中村周一方 |
| 宮 川 | 英 雄 | 46 | W | 南海毛織 山形県米沢市窪田町窪田 2500 |
| 大 橋 | 進 | 46 | W | 東邦レーョン 徳島県板野郡北島町高房 東邦レーョンクラフ内 T771-02 |
| 鳥 居 | 寿 一 | 46 | P | 出光興産 横浜市戸塚区阿久和町 3662 T246 |
| 河 野 | 政 美 | 46 | P | 昭和ゴム 東京都足立区 3-3-3 昭和ゴム若竹寮 T120 |
| 五 十 嵐 和 男 | | 46 | W | トヨタ自動車工業 愛知県宝飯郡御津町赤根水神 11 の 1 T441-03 |
| 吉 野 栄 二 | | 46 | P | 出光興産 千葉県市原市今津朝山 出光今津寮 422 号 T299-01 |
| 浅 見 武 義 | | 46 | E | 日本ヒクター 横浜市磯子区中原 3-15-13 小山荘 7 号室 |
| 太 田 | 博 | 47 | L | タケダ理研工業 K.K. 営業販売部 第二販売課 練馬区旭町 1-32-1 東京都練馬区旭町 1-29-4 タケダ理研旭寮 |

| | | |
|-----------|--------|---|
| 斎 藤 功 | 47 M | 大和設備 藤岡市東平井 1265-3 |
| 広 田 雅 司 | 47 院 W | 帝人加工糸 K K 技術部技術課 石川県小松市今江町 150 T 923 (不明) |
| 山 口 昌 男 | 48 M | 日立機電工業 K K 太田市矢場 2961 T 373 |
| 鎌 田 篤 夫 | 48 M | 足利工業大学付属高校機械科 栃木県佐野市出流原町 991 T 327-01 |
| 尾 高 秀 一 | 48 E | 三菱電機群馬製作所 群馬県太田市東本町 57-12 三菱電機渡良瀬寮 |
| 海 老 原 孝 司 | 48 E | 近畿電気工事 K K 東京営業本部 品川区東五反田 5 丁目 東京都墨田区本所 2-13-9 |
| 長 谷 健 司 | 48 E | 富士アルミニウム工業開発部 相模原市麻溝台 1800 神奈川県相模原市麻溝台 3049 相模原寮 |
| 川 崎 喜 孝 | 49 M | 五洋建設 K K 茨城県鹿島郡平井押合 1128-95 (同上) |
| 品 田 忠 保 | 49 K | 三井三池製作所 栃木県栃木市今泉町 1-7-7 三井アパート清泉寮 |
| 海 老 沼 義 郎 | 49 K | K K 大気社技術部 東京都新宿区西新宿住友ヒル内 横浜市緑区元石川町 2123-12 大気社多摩プラーザ寮 |
| 熊 田 武 夫 | 49 K | クノール食品㈱ 川崎市中原区宮内 1356 クノール食品㈱ 独身寮 |
| 山 口 明 | 49 K | 興国化学工業 足利市本城 2 丁目 1790-3 |
| 加 藤 真 知 子 | 50 C | チッソ㈱ 千葉県市原市辰巳台台東 2-17 チッソ辰巳アパート C 棟 310 号 |
| 渡 辺 等 | 50 M | 高周波熱鍊 K K 川崎市高津区二子 758-1 神奈川県茅ヶ崎市浜須賀 7-47 |
| 高 橋 茂 雄 | 50 M | 高崎製紙 草加市弁天町 草加市青柳町 4140 53 号 |
| 大 前 寛 美 | 50 S | 長谷川香料 東京都日本橋本町 4 の 1 千葉県松戸市仲井町 3-36-1 |
| 小 林 茂 | 50 M | 日産自動車 横浜市神奈川区西寺尾 日産西寺尾寮 A 502 |
| 大 島 茂 雄 | 50 M | 電々公社 前橋市文京町 4 丁目 1-10 |
| 大 浦 勝 顧 問 | | 群大工学部合成化学科滝口研 桐生市天神町 1-5-1 太田市台之郷 T 373 |

編 集 後 記

ここに皇海8号をお届けします。発行が遅れてしまい、多くの方々に迷惑をかけて申しわけありません。まず原稿の集まりが悪かったこと、原稿の提出は部則により、2週間以内となっているが、それを実行している部員は少ないし、またそれを決定した上級生自ら守っていないことに反発を感じた。多くの記録が未提出のままカットされた。次に皇海は2年ごとに発行されることになっているが、過去に集められた記録が未整理のまま放置されていた。これからは毎年整理して残しておいてほしい。次に係の不慣れ、原稿が集まるまでに長期間を要したので自然に怠慢になってしまったこと、また、部長が記録を集め、編集しなければならなかつたクラブの現実も一要因となってはいないか。

次回の皇海は、上記のことを改善し、半年以内に発行してほしいものである。



皇 海 8 号 (昭和46~49年)

発 行 日 1976年2月

発 行 者 群馬大学工学部
ワンダーフォーゲル部

編集責任者 陳 親 博

印 刷 所 桐 生 曇 写 堂